

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第186集

# 湾台Ⅱ遺跡・湾台Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター



# 湾台Ⅱ遺跡・湾台Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にとまなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸縦貫自動車道（山田道路）建設に関連して、平成2年度に発掘調査した湾台Ⅲ遺跡と、平成3年度に発掘調査した湾台Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。両遺跡とも、北東側に山田湾、南東側に船越湾を望む山麓斜面上に立地し、調査の結果、湾台Ⅱ遺跡では、縄文時代の住居跡と遺物が、湾台Ⅲ遺跡では平安時代の住居跡と鉄生産遺構が発見され、新しい資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力、御援助を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成5年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 工藤 巖

## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県下閉伊郡山田町織笠第 14 地割 32-22 ほかに所在する<sup>わんだい</sup>湾台 II 遺跡、<sup>わんだい</sup>湾台 III 遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸縦貫自動車道（山田道路）の建設に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳の遺跡番号、調査略号、調査面積及び調査期間は次のとおりである。

	遺跡番号	調査略号	調査面積	調査期間
湾台 II 遺跡	MG 14-0204	WD II-91	3,700 m <sup>2</sup>	平成 3 年 4 月 10 日～7 月 23 日
湾台 III 遺跡	MG 04-2281	WD III-90	2,000 m <sup>2</sup>	平成 2 年 8 月 20 日～10 月 8 日
- 4 野外調査及び室内整理の担当者は、次のとおりである。

湾台 II 遺跡	鈴木貞行	川村 聡
湾台 III 遺跡	鈴木貞行	藤村 隆
- 5 本報告書の執筆は、「I 調査に至る経過」を鈴木恵治が、他を鈴木貞行が担当した。
- 6 分析や鑑定は、次の方々に依頼した。(敬称略)

鉄器・鉄滓・砂鉄の分析	岩手県立博物館	赤沼 英男
炭化材の樹種同定	岩手県木炭協会	早坂松次郎
石質鑑定	佐藤環境地質研究所	佐藤 二郎
- 7 両遺跡の基準点測量は、田端測量設計株式会社に委託した。
- 8 空中写真撮影は、有限会社 NRC 岩手空撮に依頼した。
- 9 野外調査・室内整理に際して、次の方々から御教示・御協力をいただいた。(敬称略)

佐々木 健 (大槌町教育委員会)	高橋 信雄 (岩手県立博物館)
------------------	-----------------
- 10 野外調査では、山田町教育委員会及び白土堅一氏をはじめとする地元の方々の協力を得た。
- 11 調査に関わる諸記録、出土遺物等は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。



# 目次

序  
例言

## 〈本文〉

I 調査に至る経過	1	(4) 集石遺構	14
II 遺跡の立地と環境		(5) 遺構外出土遺物	14
1 位置	2	2 まとめ	23
2 地形概観	2	V 湾台III遺跡	
3 基本層序	6	1 検出された遺構と出土遺物	
III 調査と室内整理の方法		(1) 住居跡	25
1 野外調査の方法	7	(2) 住居跡状遺構・製鉄関連炉	26
2 室内整理の方法	8	(3) 土坑	34
3 掲載図版等について	8	(4) 集石遺構	34
IV 湾台II遺跡		(5) 遺構外出土遺物	34
1 検出された遺構と出土遺物		2 まとめ	40
(1) 住居跡	10	附編 湾台III遺跡出土鉄器・鉄滓の	
(2) 土坑	11	金属学的解析	42
(3) 焼土遺構	12		

## 〈図版〉

第1図 岩手県全図		第10図 J 31 土坑No.1	11
第2図 遺跡位置図		第11図 J 31 土坑No.2、No.3	13
第3図 遺跡周辺地形図	3	第12図 B 21 土坑	13
第4図 地形分類図	5	第13図 B 22 土坑	15
第5図 湾台II基本層序	6	第14図 P 24 土坑	15
第6図 湾台III基本層序	6	第15図 L 25 焼土	15
第7図 凡例	8	第16図 N 26 焼土	15
湾台II遺跡		第17図 I 25 焼土	15
第8図 湾台II遺跡遺構配置図	9	第18図 I 24 集石	15
第9図 P 24 住居跡	11	第19図 遺構内出土遺物(1)	16

第 20 図	遺構内出土遺物(2)	17
第 21 図	遺構外出土遺物 (土器)	19
第 22 図	遺構外出土遺物 (土器)	20
第 23 図	遺構外出土遺物 (石器)	21
第 24 図	遺構外出土遺物 (石器)	22

#### 湾台Ⅲ遺跡

第 25 図	湾台Ⅲ遺跡遺構配置図	24
第 26 図	J 5 住居跡	25
第 27 図	K 5 住居跡状遺構	27
第 28 図	J 6 住居跡状遺構	28

第 29 図	製鉄関連炉	29
第 30 図	E 11 土坑	29
第 31 図	J 5 集石遺構	29
第 32 図	遺構内出土遺物 (J 5 住)	30
第 33 図	遺構内出土遺物 (K 5 住状)	31
第 34 図	遺構内出土遺物	32
第 35 図	遺構内出土遺物	33
第 36 図	遺構外出土遺物 (土器)	35
第 37 図	遺構外出土遺物 (石器)	36
第 38 図	遺構外出土遺物 (石器)	37

### <写真図版>

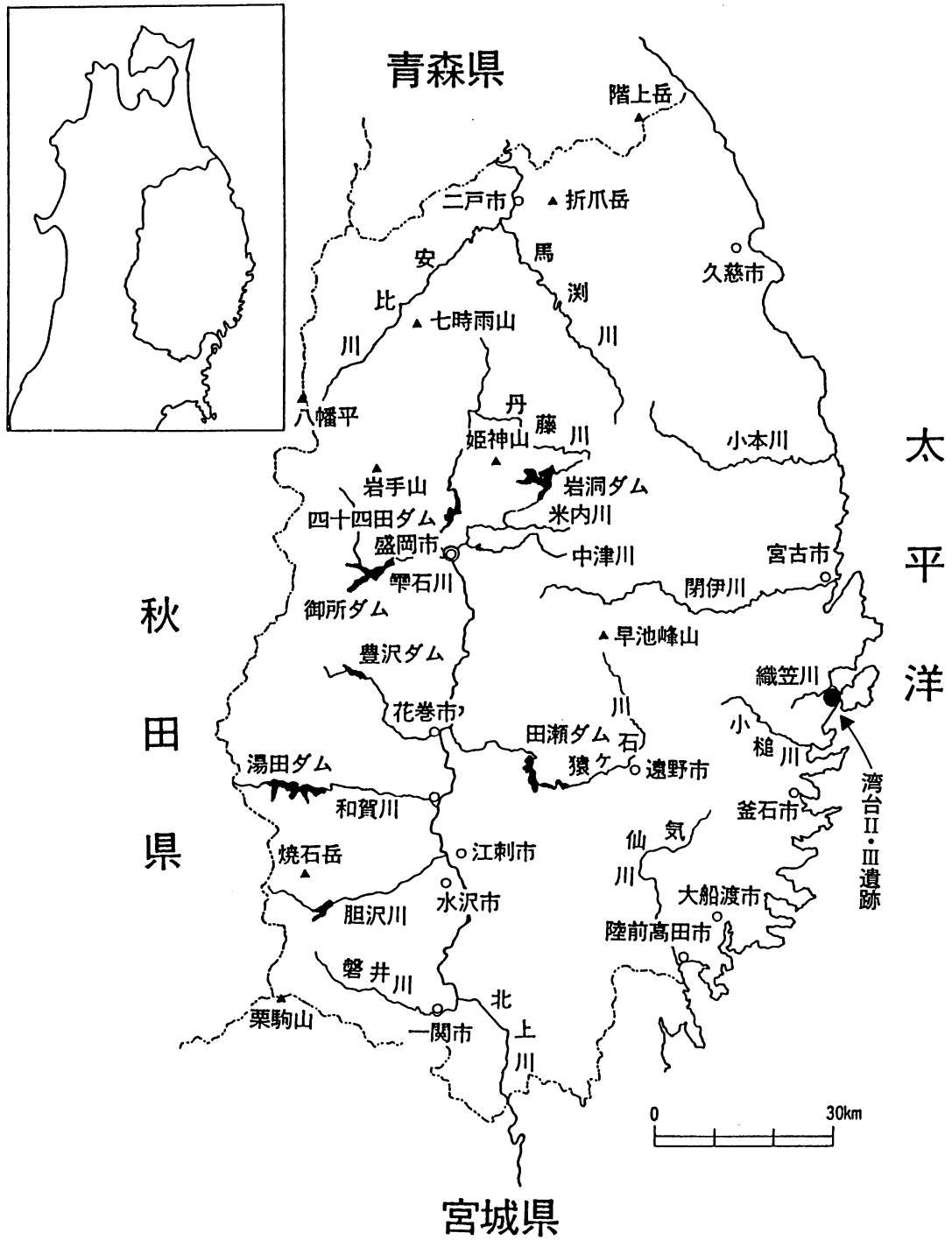
#### 湾台Ⅱ遺跡

写真図版 1	調査区全景	65
写真図版 2	P 24 住居跡(1)	66
写真図版 3	P 24 住居跡(2)	67
写真図版 4	土坑	68
写真図版 5	土坑・焼土・集石	69
写真図版 6	遺構内出土遺物他	70
写真図版 7	遺構外出土遺物 (土器)	71
写真図版 8	遺構外出土遺物 (石器)	72

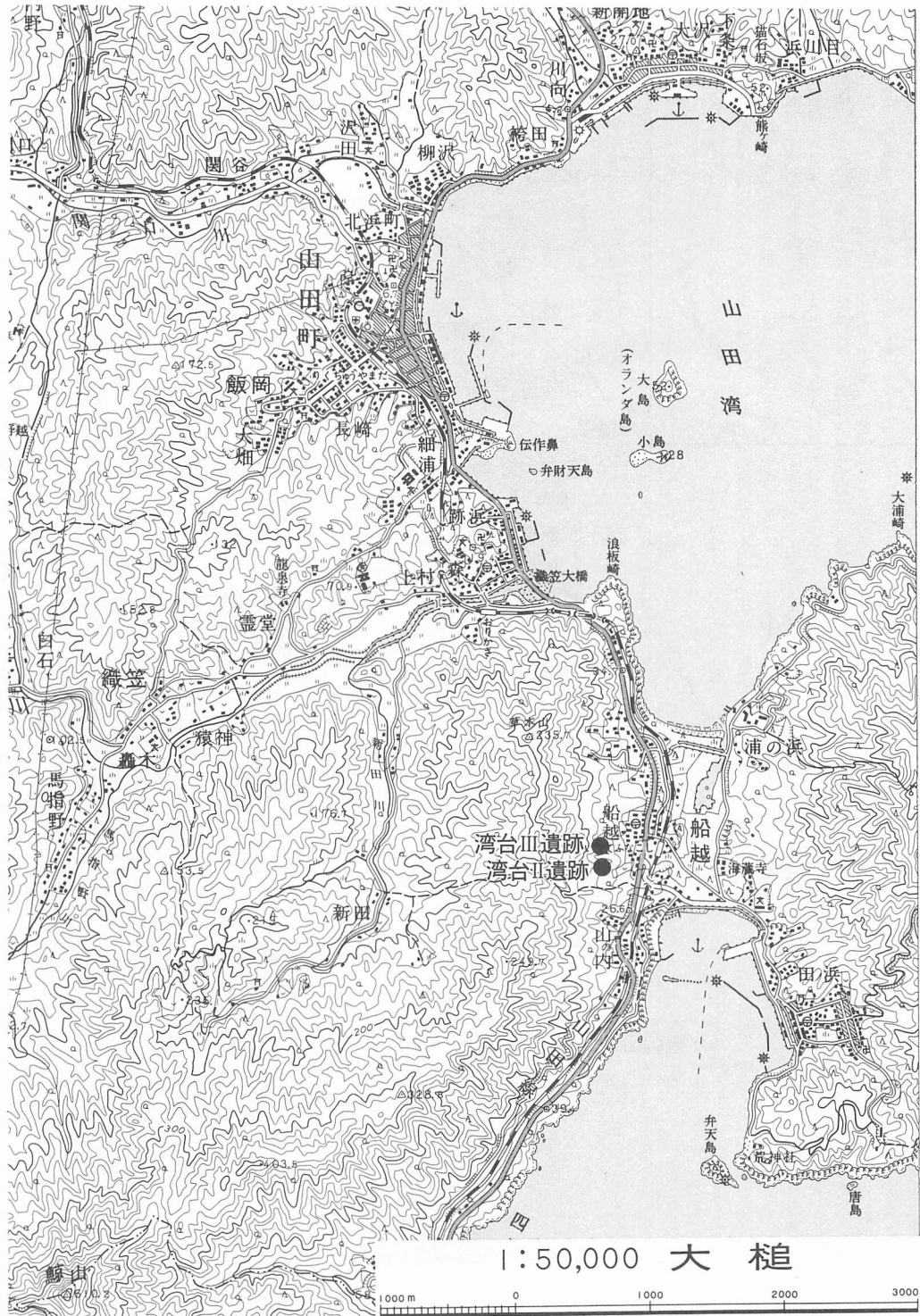
#### 湾台Ⅲ遺跡

写真図版 9	遺跡全景・土坑	73
写真図版 10	J 5 住居跡	74
写真図版 11	K 5 住居跡状遺構	75
写真図版 12	J 6 住居跡状遺構	76
写真図版 13	製鉄関連炉・集石	77
写真図版 14	遺構内出土遺物(1)	78
写真図版 15	遺構内出土遺物(2)	79
写真図版 16	遺構外出土遺物	86





第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図



## I 調査に至る経過

三陸縦貫自動車道は、仙台市と宮古市を結ぶ延長約 220 km の一般国道の自動車専用道路であり、八戸・久慈自動車道とともに、昭和 62 年 6 月に指定された全国約 14,000 km の高規格幹線道路網の一部をなすものである。

三陸縦貫自動車道の一部をなす山田道路は、山田町関谷と山田町船越の間約 7,800 m の区間であり、国道 45 号の市街地での増大する交通需要や隘路区間の解消を目的に一部を昭和 62 年に三陸縦貫自動車道として事業化されたものであるが、昭和 63 年には新たに南側延長部を併せて高規格幹線道路として事業の促進が図られた。

この間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和 62 年度に分布調査と試掘調査を実施し、平成元年 9 月 5 日付け「教文第 415 号」で事業について照会し、9 月 25 日付け「建東陸調第 111 号」の回答をうけて建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と協議を行い、発掘調査を岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これをうけて、当埋蔵文化財センターは、平成 2 年 7 月 31 日付けの委託契約にもとづいて湾台Ⅲ遺跡の調査に着手することとなり、同年 8 月 20 日から 10 月 8 日まで調査を実施した。また湾台Ⅱ遺跡については、平成 3 年 4 月 12 日付けの委託契約により 4 月 10 日から 7 月 23 日まで調査を実施した。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 位置

湾台II遺跡・湾台III遺跡の所在する山田町は岩手県の東端、太平洋に面した陸中海岸の中ほどに位置し、北は宮古市、南は大槌町、西は一部を川井村・新里村と接している。直線距離で盛岡市まで約73 km、宮古市まで約19 km、釜石市まで約22 kmである。

湾台II遺跡は岩手県下閉伊郡山田町船越第5地割4-2ほかに所在し、東日本旅客鉄道山田線岩手船越駅の西方約0.4 km付近に位置する。湾台III遺跡は湾台II遺跡の北側に隣接し、同船越第5地割9-1ほかに所在する。

### 2 地形概観

遺跡が所在する山田町は東側を太平洋に面し、周囲は湾と岬が入り組んだ屈曲の多いリアス式海岸特有の海岸線を呈している。したがって、段丘などの平坦面は存在せず、山地が海に張り出す地形が大部分を占める。町内の大部分を占める山地は北上山地の東縁部にあたり、太平洋岸沿いに丘陵地や海岸段丘を伴っている。標高300~800 mの山地が海岸まで迫る地形のため、低地は河川の流域や山田湾、船越湾に面する比較的狭い範囲に限定される。大槌町と接する北西部の高滝森(1,160 m)、水呑場山(948 m)、鳥古山(850 m)、山母森(806 m)を経て鯨山(610 m)に至る尾根は高く険しい。

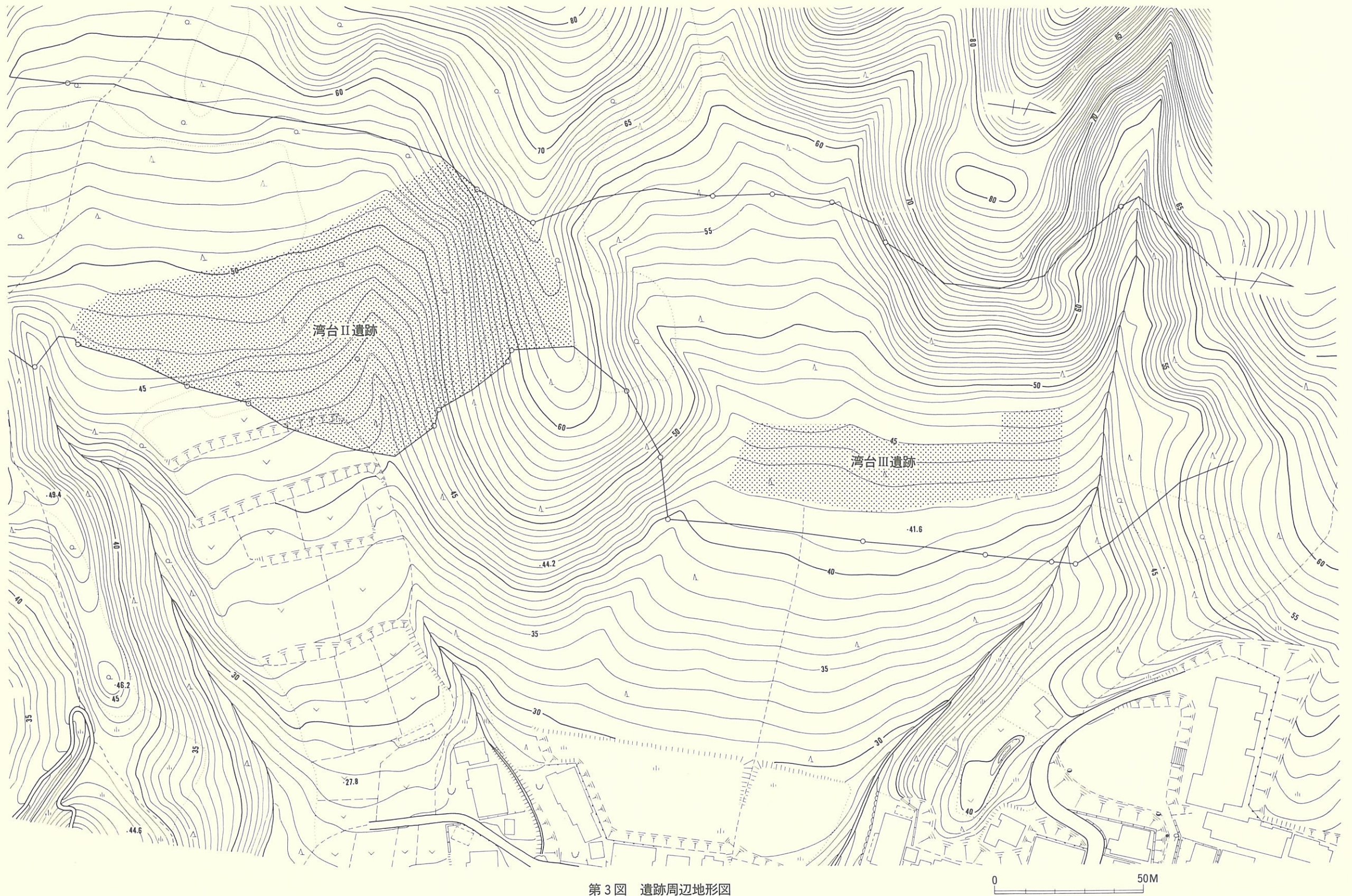
町内の主な河川は山田湾の湾奥に注ぎ込む関口川と織笠川である。他に津軽石川や織笠川の支流の馬指野川、新田川等がある。これらの川は水呑場山から鯨山に至る尾根の東側を源流部として深いV字谷を刻みながら東流を続ける。

今回調査した両遺跡は、鯨山山地と船越低地の境にあたる山麓地斜面上に立地し、北東方向に山田湾を、南東方向に船越湾を望むことができる。調査区の現状は、両遺跡とも山林である。

### 《参考・引用文献》

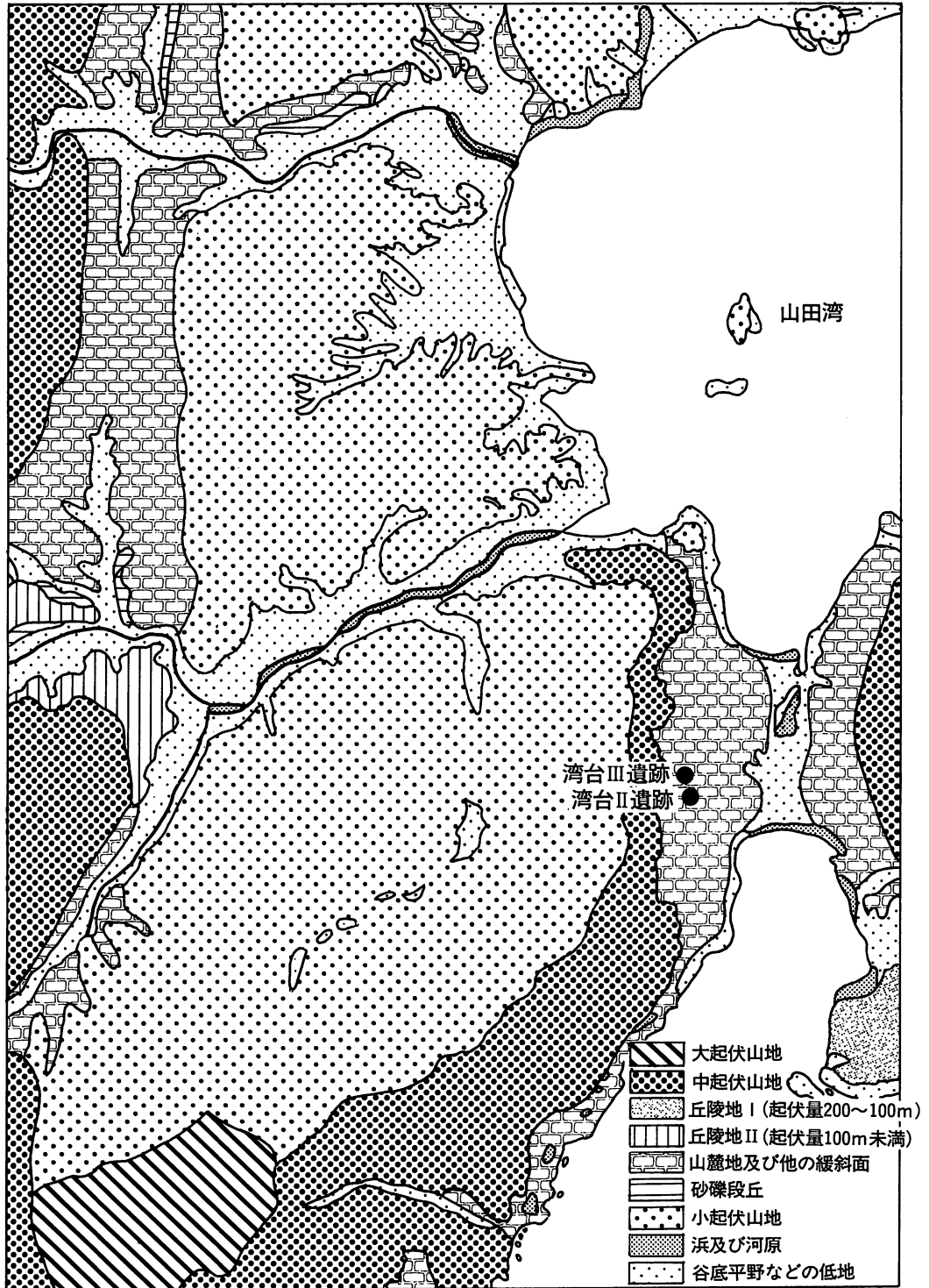
- 岩手県企画開発室 (1974) 『土地分類基本調査 大槌・霞露ヶ岳』  
角川書店 (1985) 『角川日本地名大辞典・岩手県』  
山田町教育委員会 (1986) 『山田町史』





第3图 遺跡周边地形图





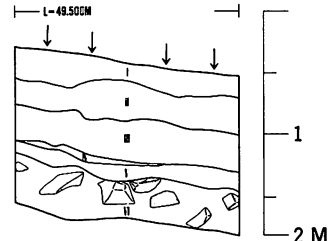
第 4 図 地形分類図

### 3 基本層序

湾台II、湾台III遺跡とも、全体に土石流堆積物が分布し、地形的緩斜面を形成している。また、各沢沿いには花崗岩起源の崖錐堆積物が分布している。以下、遺跡別に層序の概略を述べる。

#### 湾台II遺跡 (第5図)

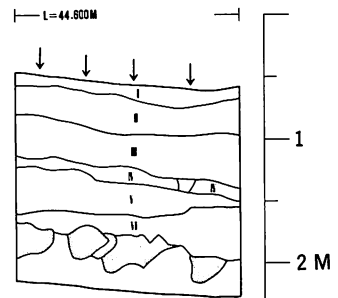
- I 層 黒色土(10 YR 2/1)シルト質土。表土層で木根多い。しまり弱い。礫少量混入。層厚 15～30 cm。
- II 層 黒色土(10 YR 1.7/1)シルト質土。しまり弱い。直径 2～4 cm の礫点在。層厚 13～22 cm。
- III 層 黒褐色土(10 YR 2/2)シルト質土。しまり強い。直径 2～7 cm の礫多数混入。
- IV 層 黒褐色土(7.5 YR 3/2)シルト質土。しまり強い。直径 3～12 cm の礫多数混入。
- V 層 暗褐色土(7.5 YR 3/3)シルト質土。しまり強い。直径 2～12 cm の礫多数混入。
- VI 層 黄褐色土(10 YR 5/6)粘土質土。しまり強い。直径 5～25 cm の礫多数混入。



第5図 湾台II土層柱状図

#### 湾台III遺跡 (第6図)

- I 層 黒褐色土(10 YR 3/2)シルト質土。表土層。しまり弱い。層厚 8～17 cm。
- II 層 黒色土(10 YR 2/1)シルト質土。しまり強い。層厚 23～33 cm。
- III 層 黒褐色土(10 YR 2/3)シルト質土。しまり強い。層厚 25～43 cm。
- IV 層 褐色土(10 YR 4/6)シルト質土。しまり強い。極小粒礫 2%混入(5 YR 8/3 淡黄色)
- V 層 黄褐色土(10 YR 5/6)シルト質土。しまりやや弱い。上層より混入礫少ない。
- VI 層 明黄褐色土(10 YR 6/6)シルト質土。しまり強い。



第6図 湾台III土層柱状図

### III 調査方法と室内整理

#### 1 野外調査の方法

##### (1) グリットの設定

###### 〔湾台II遺跡〕

調査範囲内に平面直角座標第X系により、次の2点を設定した。

基点1  $X = -63,050.000 \text{ m}$   $Y = 98,140.000 \text{ m}$   $H = 49.623 \text{ m}$

基点2  $X = -63,020.000 \text{ m}$   $Y = 98,140.000 \text{ m}$   $H = 47.812 \text{ m}$

この2点のうち、基点1を座標原点とし、原点と基点2を結ぶ線と、原点を通りこれと直交する線を基準線とした。この原点より東西、南北とも5m毎に区切り、調査範囲をカバーするように調査区の南端から北に向かって1～33、西端から東に向かってA～Vとし、グリット名はA1区・B2区等と呼称した。

###### 〔湾台III遺跡〕

調査範囲内に平面直角座標第X系により、次の2点を設定した。

基点1  $X = -62,800.000 \text{ m}$   $Y = 98,170.000 \text{ m}$   $H = 42.873 \text{ m}$

基点2  $X = -62,840.000 \text{ m}$   $Y = 98,170.000 \text{ m}$   $H = 43.744 \text{ m}$

この2点のうち、基点1を座標原点とし、原点と基点2を結ぶ線と、原点を通りこれと直交する線を基準線とした。この原点より東西、南北とも5m毎に区切り、調査範囲をカバーするように調査区の北端から南に向かって1～26、東端から西に向かってA～Lとし、グリット名はA1区・B2区等と呼称した。

##### (2) 粗堀・遺構検出

両遺跡とも雑物除去後、調査区域内の数カ所にトレンチを入れて土層の確認を行い、その後表土除去を重機で行った。

検出した遺構の呼称は、グリット名を頭に付して呼称し、同一グリット内で重複した場合には検出した順にNoを付した。

##### (3) 精査・出土遺物の取り上げ

精査にあたっては住居跡は4分法、土坑は2分法で行った。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等、必要な記録を取った。遺構外出土遺物は、グリット単位で層位を記入して取り上げた。

##### (4) 実測

平面実測は簡易遣り方測量法で行った。両遺跡とも基準点を原点とする座標系を用い、グリ



ット軸に合わせた1 m メッシュを基本とした。断面形は任意の高さで作成した。実測図は20分の1を原則とし、場合によっては任意縮尺で作成した。

(5) 写真記録

写真撮影には6×7 cm 版モノクロ1台、35 mm 版モノクロと同カラーリバーサル各1台をセットで使用した。但し、状況に応じて6×7 cm 版を省略している場合もある。

2 室内整理の方法

遺構については実測図の点検、合成、トレース、図版作成の順に作業を進めた。

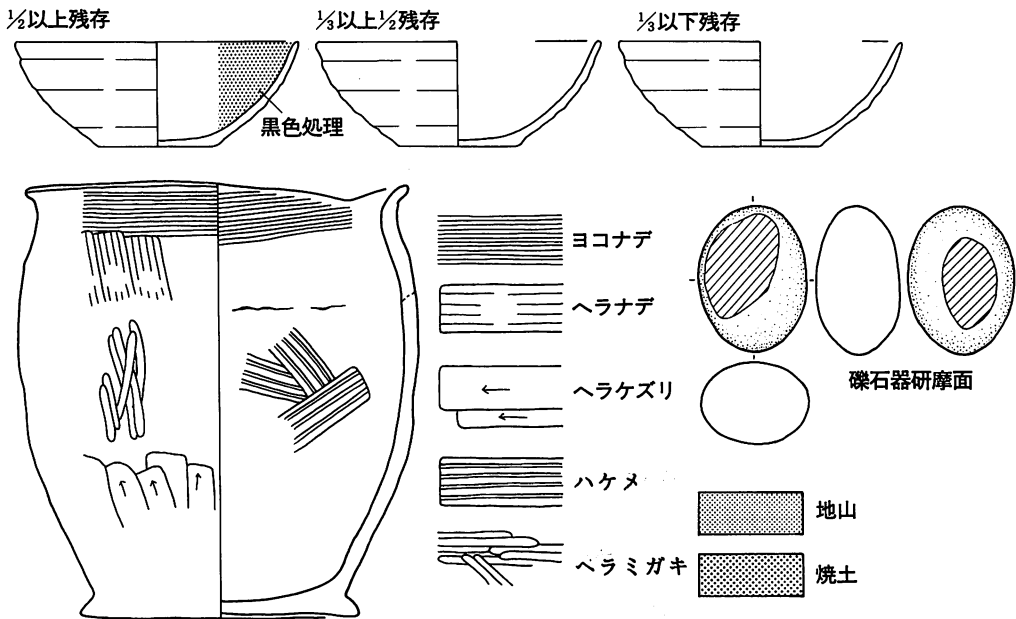
遺物については接合、復元、仕分、登録を行い、その後、写真撮影、実測や拓本、トレース、計測、図版作成を順に進めた。

3 掲載図版等について

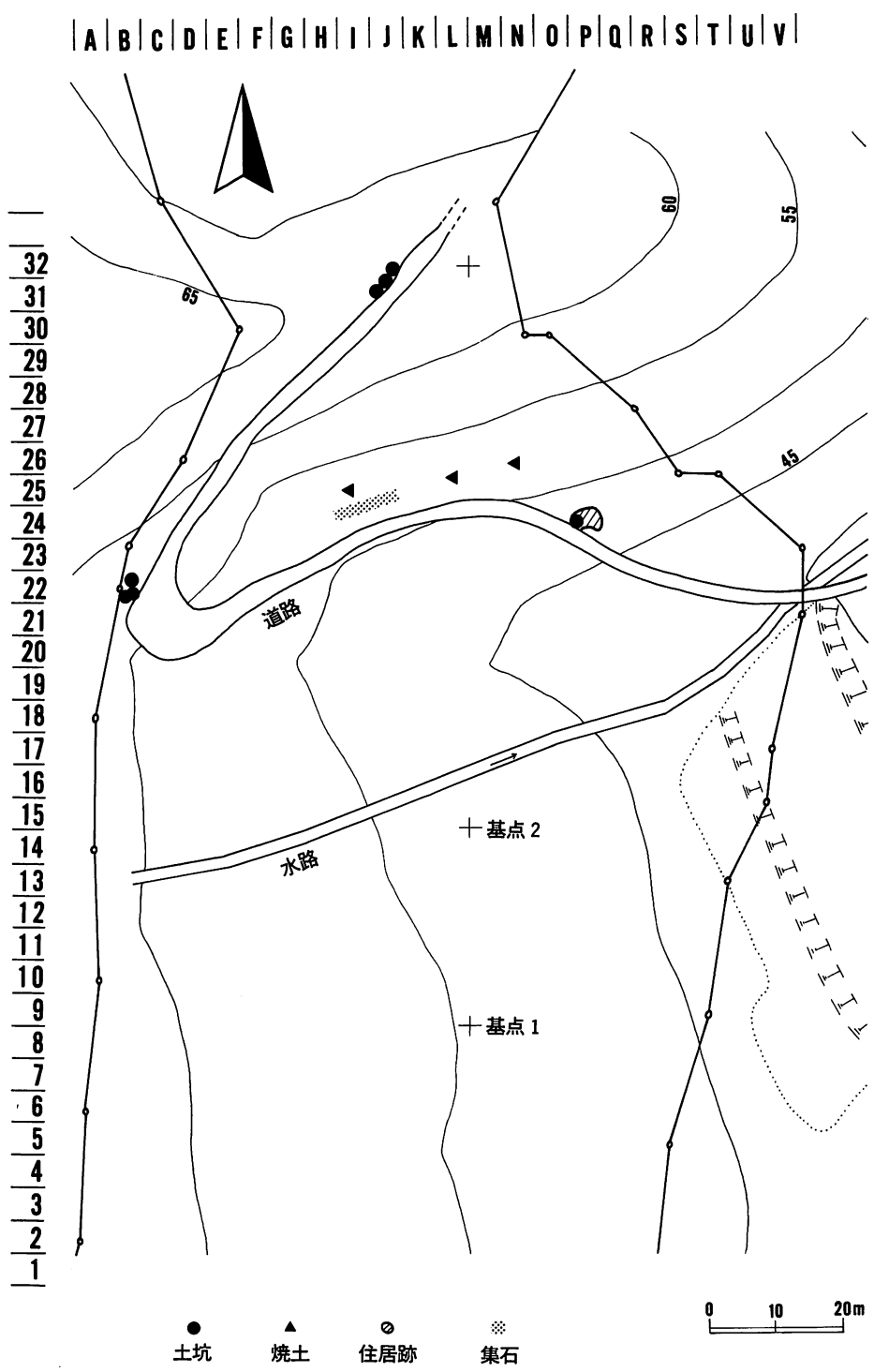
報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は、両遺跡とも40分の1と60分の1を原則として縮尺率を表示した。遺物実測図および土器拓影の縮尺は、個々に縮尺率を別に付した。

遺物は遺跡毎に遺物図版、写真図版を同一番号で統一した。

挿図や遺物実測図の表現方法は、凡例の通りである。



第7図 凡例



第 8 图 湾台 II 遗址遺構配置图

## IV 湾台II遺跡

### 1 検出された遺構と出土遺物

本遺跡から検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑8基、焼土遺構3基、集石遺構1か所である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、羽口、鉄滓である。

#### (1) 住居跡

##### P 24 住居跡 (第9図、写真図版2・3)

〈検出状況〉調査区北東部P 24 区の南向き緩斜面に位置し、南側約2分の1を木材搬出用道路建設のため、重機により削平されていた。削平断面に石囲い炉が検出されるとともに、土器片が出土していたため住居跡と確認された。

〈平面形・規模〉平面形は円形もしくは楕円形で、規模は径5 m前後と推定される。

〈埋土〉埋土は7層に細分される。北から南側への、流れ込みが見られる。

〈壁〉残存する北側壁の立ち上がりはほぼ垂直に立ち上がる。東側は流出のためはっきりしない。

〈床〉床面は平坦である。特に中央部(炉の周辺)は非常に堅い。北側壁際で周溝の一部と考えられる浅い掘り込みが検出された。

〈柱穴・小土坑〉13個検出された。規模は計測表のとおりである。

〈炉〉炉跡の位置は削平のためはっきりしないが、残存平面プランからはほぼ中央部と推定される。炉の形態は扁平な礫を方形に組んだ燃焼部をもつ複式炉である。焼土は燃焼部より、炉石北側に続く掘り込み部に多く見られた。

##### 出土遺物 (第19・20図、写真図版6)

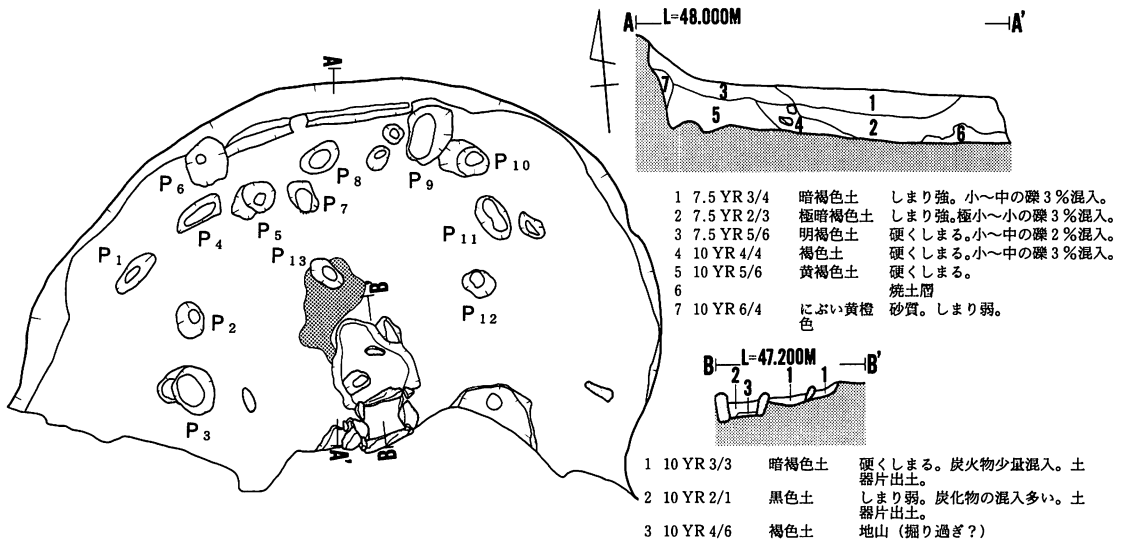
〈出土状況〉遺物はほとんど床面近くからの出土で、土器の総量はコンテナ約1箱である。

〈土器〉器種は深鉢が主体である。3・4は小型土器である。詳細は表に示す。

〈石器〉埋土下層と床面から5点出土した。

〈時期〉出土した土器が大木10式で縄文時代中期に属する。

図版番号	出土地点・層位	器種	部位	文 様 の 特 徴 ・ 器 形	口 径	底 径	器 高	色 調	写 真 番 号
19-1	P 24 住 床面	深鉢	口～体	口縁部に横位平行沈線(上部は調整無文帯)、体部に沈線区面文	(28.5)	—	—	7.5 YR 6/3	6-1
19-2	P 24 住 床面	深鉢	口～体	体部上半に沈線区面文、磨消縄文、地文は単節斜縄文	(20.6)	—	—	5 YR 5/6	6-2
19-3	P 24 住 床面	深鉢	体～底	縦位沈線、小型精製深鉢	—	4.0	—	10 YR 7/4	6-3
19-4	P 24 住 床面	浅鉢	口～底	無文、整形は荒いヘラナデ。小型土器	8.0	5.8	5.9	10 YR 8/2	6-4
19-5	P 24 住 床面	深鉢	体～底	単節縄文、綾絡文	—	11.4	—	5 YR 4/4	6-5
20-6	P 24 住 床面	深鉢	体部	単節縄文	—	—	—	5 YR 6/8	6-6
20-7	P 24 住 床面	深鉢	体～底	単節縄文	—	12.7	—	5 YR 6/3	6-7



柱穴

No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>
径	40×16	22×28	40×32	42×16	26	30	26	34×20	34×46	40×26	40×22	24	30×18
深	9.5	47	84	10	35	18	35	37	49	25	21	20	18

第9図 P24住居跡 S=1/60

(2) 土坑

J 31 土坑No. 1 (第10図、写真図版4)

調査区北側J 31区、北側に湾台III遺跡を望む、尾根の頂上部に当たる狭い平坦面に位置する。南東側の一部を木材搬出用道路に削平されている。平面形は削平のため不明である。断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部?×120 cm、深さは最大53 cmである。底面は平坦である。埋土は3層で構成される。2層には炭化物が混入している。

時期の特定はできない。

J 31 土坑No. 2 (第11図、写真図版4)

前述のJ 31土坑No. 1南西側に並んで検出された。南東側の一部は削平されている。平面形は開口部・底部ともに楕円形と推定される。規模は開口部長径230 cm、深さ71 cmである。底面は平坦である。

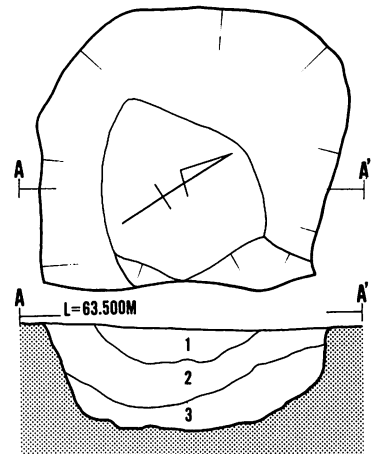
埋土は5層で構成される。自然堆積で、上位層はしまりが弱い。

埋土下位より78の磨石1点が出土している。

時期の特定はできない。

J 31 土坑No. 3 (第11図、写真図版4)

J 31土坑No. 2と一部接して検出された。南東側の一部は削平されている。平面形は削平のため不明である。



- 1 7.5 YR 2/2 黒褐色土 しまり弱。木根多い。  
 2 7.5 YR 3/4 暗褐色土 しまり弱。  
 3 7.5 YR 4/6 褐色土 しまり不均一。

第10図 J 31土坑No. 1 S=1/40



断面形は皿形を呈する。規模は開口部短径 100 cm、深さは 32 cm である。底面は狭く、西側に段をもつ。

埋土は 4 層で構成される。上位から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土の順で全体にしまり弱くぼそぼそしている。

出土遺物がなく、時期の特定はできない。

#### B 21 土坑（第 12 図、写真図版 5）

調査区西端の B 21 区斜面上に位置し、南東側は大きく削平されている。平面形は削平のため不明である。断面形と埋土から複数の土坑の重複が考えられるが、新旧関係を明らかにすることができなかった。平面形からは 3 基ないし 4 基の土坑の存在が推定される。これらの土坑は地山（マサ土）を掘り込んでいる。深さは最大 86 cm である。

埋土は 23 層に細分される。斜面のため砂質褐色土の流れ込みが層を構成している。

出土遺物はなく、遺構の所属時期、用途は不明である。

#### B 22 土坑（第 13 図、写真図版 5）

調査区西端の B 22 区斜面上に位置し、南側約 1.5 m に B 21 土坑が隣接する。斜面下方にあたる南西の壁は流され検出されなかった。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長径 159 cm である。断面形は皿状を示す。

埋土は 10 層で構成される。黒褐色土と褐色土で構成され、全般にしまりが弱い。

出土遺物は 13・14 の羽口と 15 の鉄滓が埋土 1 層から出土した。

#### P 24 土坑（第 14 図、写真図版 4）

調査区北東部 P 24 区の南向き緩斜面に位置し、P 24 住居跡と重複する。検出面は住居跡と同位であり、埋土中に確認された。平面形は南側が削平されているため不明である。残存規模は長径 214 cm で深さは 18 cm である。断面形は浅皿状を示し、底面は平坦である。

埋土は 4 層に細分される。黒褐色土が主体で、全般にしまりが弱い。

出土遺物は 16 の剥片石器が 1 点出土した。遺構の所属時期、用途は不明である。

### (3) 焼土遺構

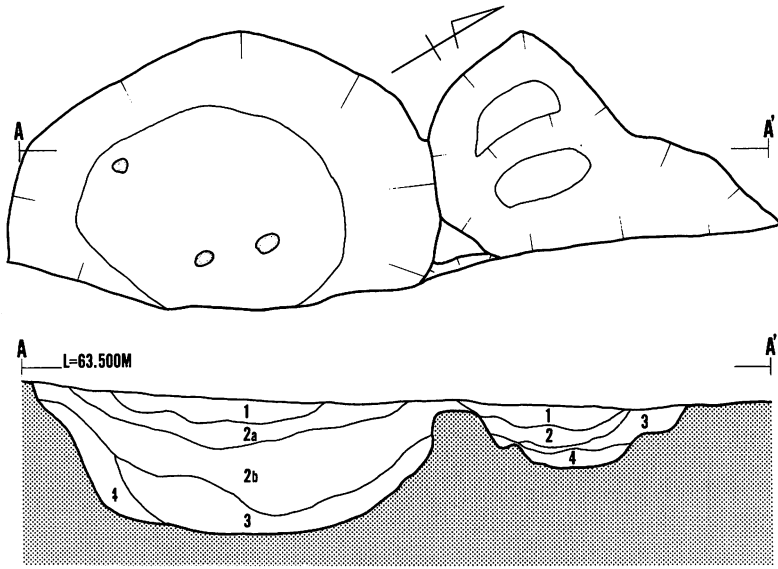
#### L 25 焼土（第 15 図、写真図版 5）

調査区中央部北側の南向斜面に位置する。南東約 10 m には P 24 住居跡があり、本遺構はこの住居跡より 1 段高い面にあたる。トレンチの断面観察によると、この場所は斜面に盛土をして狭い平坦面を造り出したことを示している。遺構検出面は厚い盛土層を取り除いた面である。

焼土の範囲は長径 70 cm、短径 44 cm、厚さ 10 cm で、平面形は不整形を呈する。

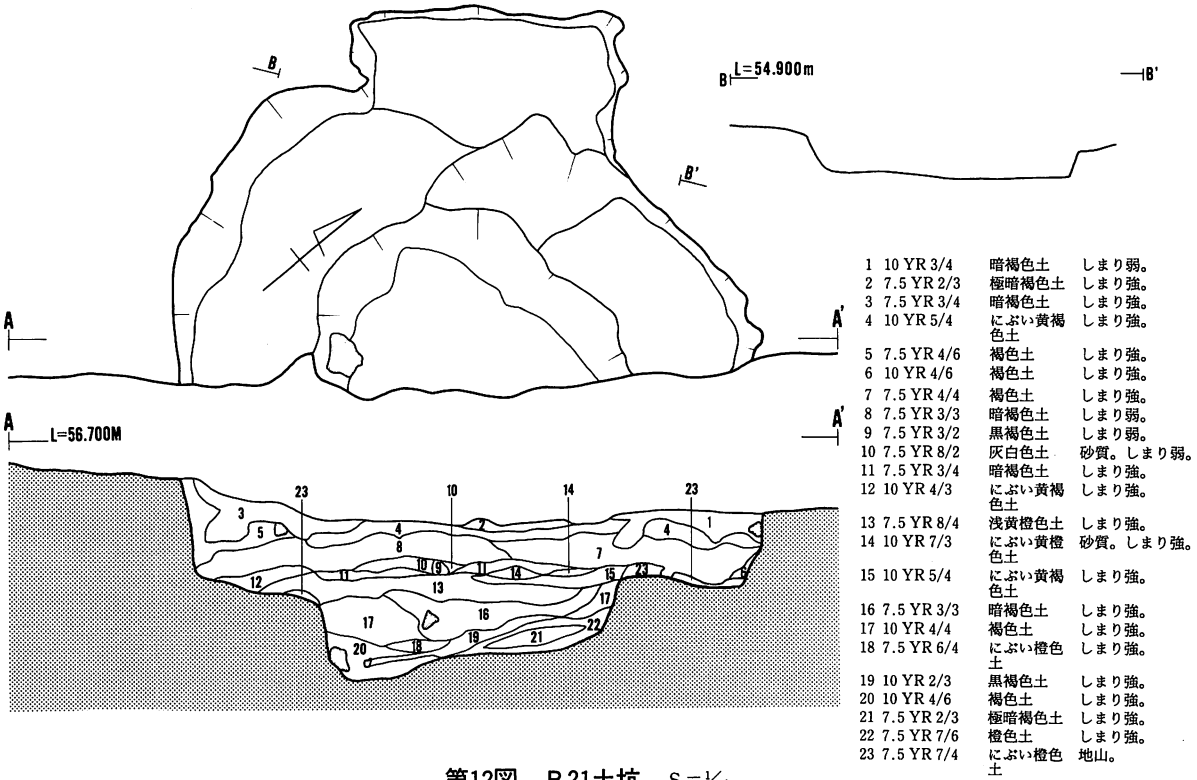
焼土東脇から弥生土器片が出土している。

#### N 26 焼土遺構（第 16 図、写真図版 5）



- J 31 土坑No 2
- 1 7.5 YR 2/2 黒褐色土
  - 2a 7.5 YR 3/4 暗褐色土
  - 2b 7.5 YR 3/3 暗褐色土
  - 3 7.5 YR 4/6 褐色土
  - 4 7.5 YR 4/3 褐色土
- J 31 土坑No 3
- 1 7.5 YR 2/2 黒褐色土
  - 2 7.5 YR 3/4 暗褐色土
  - 3 7.5 YR 3/3 褐色土
  - 4 7.5 YR 4/6 褐色土

第11図 J 31土坑No. 2・No. 3 S=1/40



- 1 10 YR 3/4 暗褐色土 しまり弱。
- 2 7.5 YR 2/3 極暗褐色土 しまり強。
- 3 7.5 YR 3/4 暗褐色土 しまり強。
- 4 10 YR 5/4 におい黄褐色土 しまり強。
- 5 7.5 YR 4/6 褐色土 しまり強。
- 6 10 YR 4/6 褐色土 しまり強。
- 7 7.5 YR 4/4 褐色土 しまり強。
- 8 7.5 YR 3/3 暗褐色土 しまり弱。
- 9 7.5 YR 3/2 黒褐色土 しまり弱。
- 10 7.5 YR 8/2 灰白色土 砂質。しまり弱。
- 11 7.5 YR 3/4 暗褐色土 しまり強。
- 12 10 YR 4/3 におい黄褐色土 しまり強。
- 13 7.5 YR 8/4 浅黄褐色土 しまり強。
- 14 10 YR 7/3 におい黄褐色土 砂質。しまり強。
- 15 10 YR 5/4 におい黄褐色土 しまり強。
- 16 7.5 YR 3/3 暗褐色土 しまり強。
- 17 10 YR 4/4 褐色土 しまり強。
- 18 7.5 YR 6/4 におい橙色土 しまり強。
- 19 10 YR 2/3 黒褐色土 しまり強。
- 20 10 YR 4/6 褐色土 しまり強。
- 21 7.5 YR 2/3 極暗褐色土 しまり強。
- 22 7.5 YR 7/6 橙色土 しまり強。
- 23 7.5 YR 7/4 におい橙色土 地山。

第12図 B 21土坑 S=1/40

調査区中央部北側の南向斜面に位置する。西側約 9 m に L 25 焼土がある。焼土の範囲は長径 70 cm、短径 30 cm、厚さ 7 cm で、平面形は不整形を呈する。

焼土周辺の同位面から弥生土器片が出土している。

#### I 25 焼土 (第 17 図)

調査区中央部北側の南向斜面に位置する。東側約 16.5 m に L 25 焼土がある。焼土の範囲は長径 90 cm、短径 24 cm、平面形は不整形を呈する。

遺物は周辺部からも出土していない。

#### (4) 集石遺構

##### I 24 集石遺構 (第 18 図、写真図版 5)

調査区中央部北側に位置し、前述の焼土遺構 I 25 焼土南側の造成盛土した縁に沿って検出された。検出面は盛土下位で焼土遺構よりも高位である。

集石の規模は長さ 9.6 m、幅 0.4~1.2 m で長軸方向は N-73°-E である。

遺物は出土していない。

#### (5) 遺構外出土遺物 (第 21~24 図、写真図版 6~8)

遺構外の出土遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、鉄滓である。これらの総量は少なく、縄文土器コンテナ 1 箱、弥生土器 2 袋、石器 20 点、鉄滓コンテナ 1 箱の出土である。

##### ① 土器

**縄文土器**：縄文土器の大半は調査区中央にあたる L 11 区周辺、II 層 (黒色土) からの出土である。器種は殆ど深鉢である。

**弥生土器**：弥生土器は調査区北側南向き斜面、焼土遺構周辺部の狭い範囲に限定される。器種は大半が破片のため、不明なものが多い。

##### ② 石器

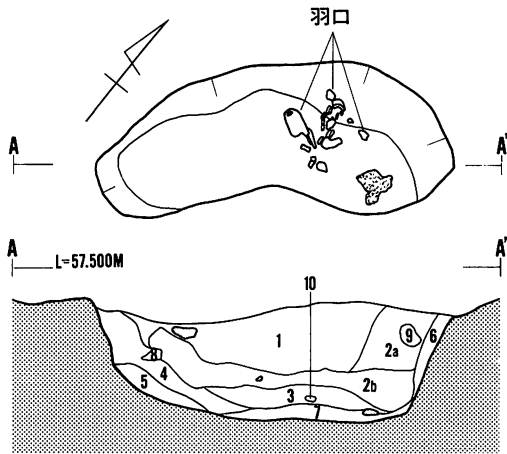
石器の種類は剝片石器 12 点、磨製石器 1 点、礫石器 7 点である。

##### ③ 鉄滓

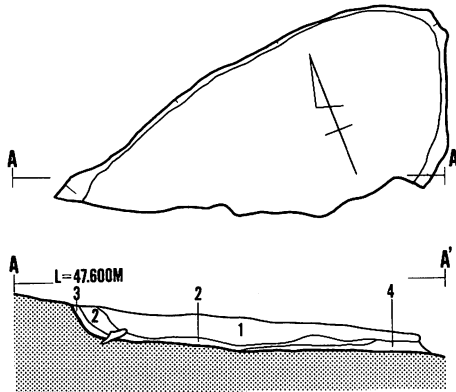
鉄滓は調査区西端部南東向き斜面、B 21 区・B 22 区周辺部から約 30 kg 出土した。

弥生土器観察表

図版番号	出土地点・層位	器種	部位	文 様 の 特 徴 ・ 器 形	備 考	写真番号
21-25	J 25 区 II 層	甕	口~体	沈線文、捺糸文	色調 10 YR 6/4 25 と同じ	7-25
21-26	J 25 区 II 層	甕	口~体	沈線文、捺糸文		7-26
22-47	I 25 区 II 層	甕	口縁部	交互刺突		7-47
22-48	I 25 区 II 層	甕	口縁部	捺糸文		7-48
22-49	I 25 区 II 層	甕	口縁部	交互刺突		7-49
22-50	Q 25 区		体部	無文		7-50
22-51	Q 25 区 II 層	甕	体部	捺糸文		7-51
22-52	L 25 区 II 層	甕	体部	捺糸文		7-52
22-53	J 25 区 II 層	甕	体部	捺糸文		7-53
22-54	L 25 区 II 層	甕	体部	捺糸文		7-54
22-55	M 25 区		体部	沈線文、棒状刺突		7-55
22-56	L 25 区 II 層		口縁部	沈線文、棒状刺突		7-56
22-57	I 25 区 II 層		体部	沈線文		7-57

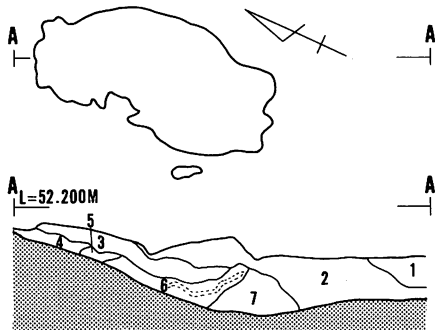


第13図 B22土坑 S=1/40



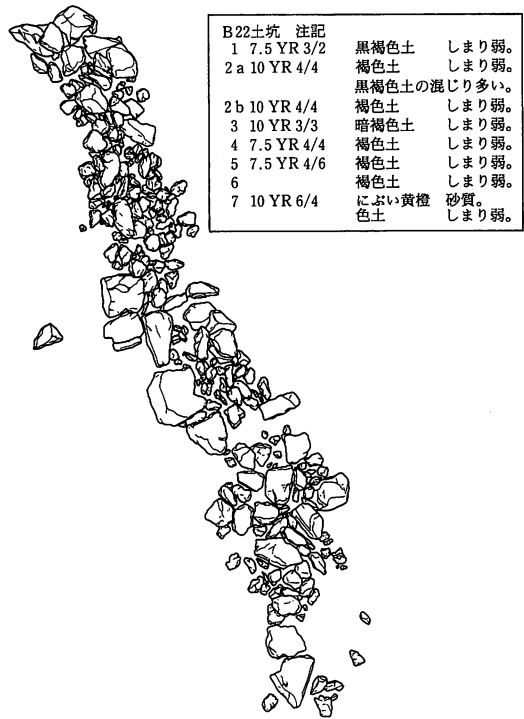
- |   |           |      |                |
|---|-----------|------|----------------|
| 1 | 10 YR 2/3 | 黒褐色土 | しまり弱。炭化物混入。    |
| 2 | 10 YR 2/1 | 黒色土  | しまり弱。炭化物層状に混入。 |
| 3 | 10 YR 2/3 | 黒褐色土 | 1層と同じ。         |
| 4 | 10 YR 3/4 | 暗褐色土 | 砂質。しまり弱。       |

第14図 P24土坑 S=1/40

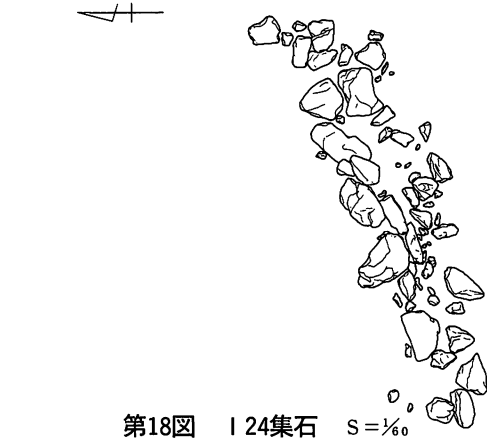


- |   |            |       |                     |
|---|------------|-------|---------------------|
| 1 | 7.5 YR 2/4 | 暗褐色土  | しまり弱。               |
| 2 | 7.5 YR 3/2 | 黒褐色土  | しまり弱。               |
| 3 | 2.5 YR 4/8 | 赤褐色土  | 硬くしまる。              |
| 4 | 7.5 YR 3/4 | 暗褐色土  | しまり強。               |
| 5 | 5 YR 3/6   | 暗赤褐色土 | しまり強。               |
| 6 | 7.5 YR 4/6 | 褐色土   | しまり強。点線部分に焼土が帯状に混入。 |
| 7 | 7.5 YR 3/3 | 暗褐色土  | しまり弱。               |

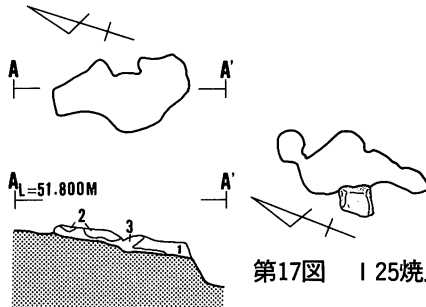
第15図 L25焼土 S=1/40



- |          |            |                |
|----------|------------|----------------|
| B22土坑 注記 |            |                |
| 1        | 7.5 YR 3/2 | 黒褐色土 しまり弱。     |
| 2a       | 10 YR 4/4  | 褐色土 しまり弱。      |
|          |            | 黒褐色土の混じり多い。    |
| 2b       | 10 YR 4/4  | 褐色土 しまり弱。      |
| 3        | 10 YR 3/3  | 暗褐色土 しまり弱。     |
| 4        | 7.5 YR 4/4 | 褐色土 しまり弱。      |
| 5        | 7.5 YR 4/6 | 褐色土 しまり弱。      |
| 6        |            | 褐色土 しまり弱。      |
| 7        | 10 YR 6/4  | にぶい黄橙 砂質。しまり弱。 |
|          |            | 色土 しまり弱。       |



第17図 I25焼土 S=1/40

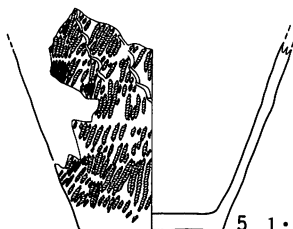
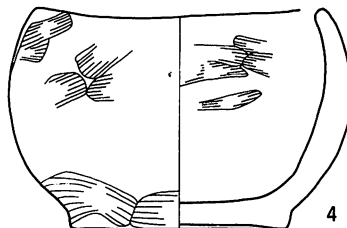
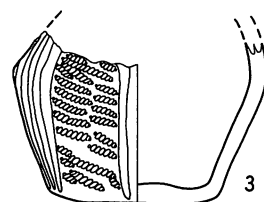
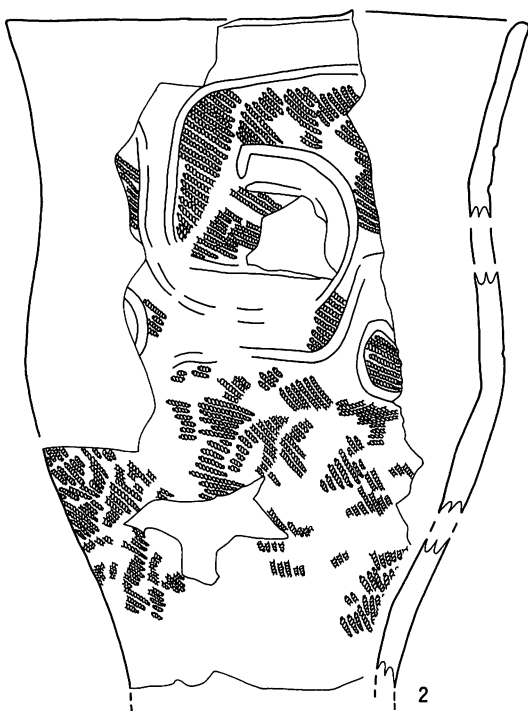
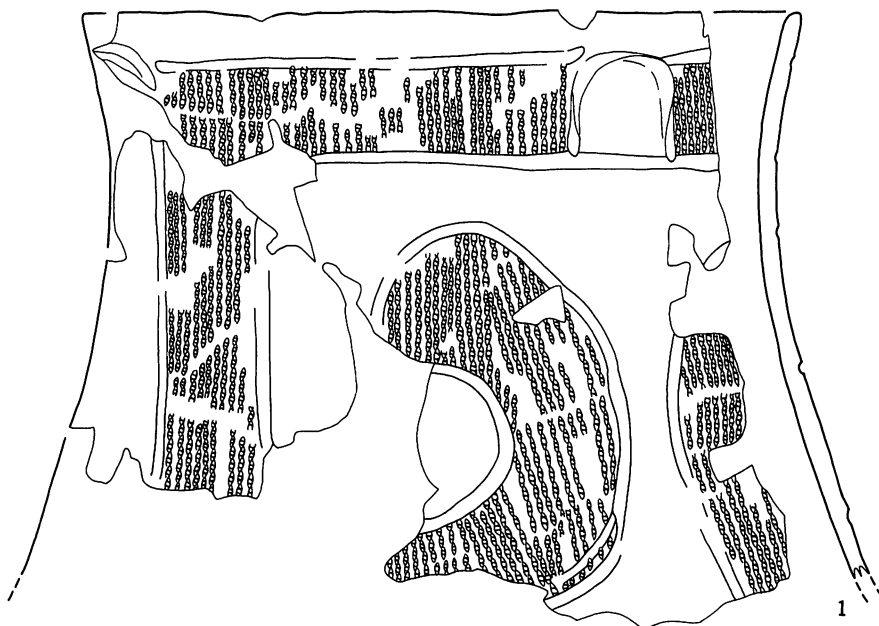


- |   |            |       |       |
|---|------------|-------|-------|
| 1 | 2.5 YR 4/8 | 赤褐色土  | しまり弱。 |
| 2 | 5 YR 3/6   | 暗赤褐色土 | しまり弱。 |
| 3 | 10 YR 4/4  | 褐色土   | しまり弱。 |

第16図 N26焼土 S=1/40

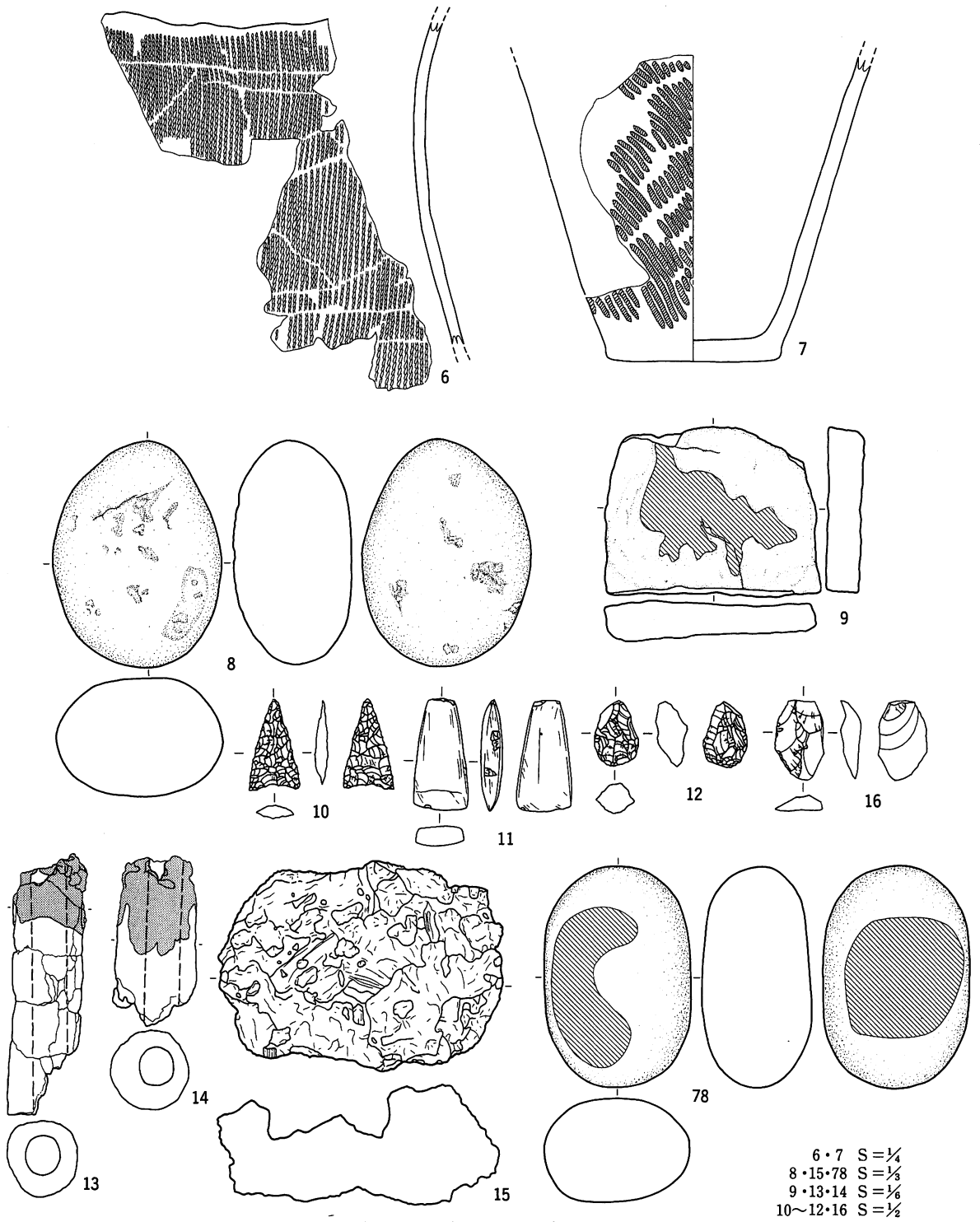
第18図 I24集石 S=1/40





1・2 S = 1/4  
 3・4 S = 1/2  
 5 S = 1/4

第19図 遺構内出土遺物(1)



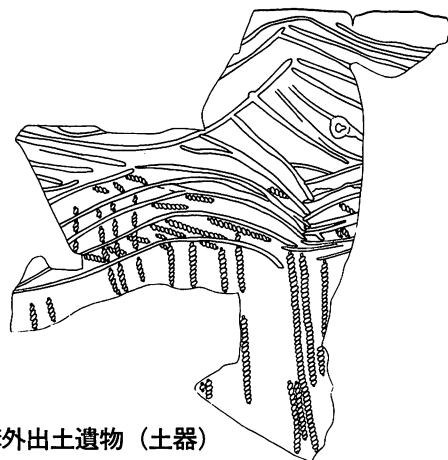
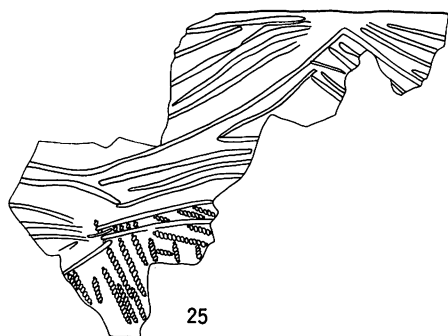
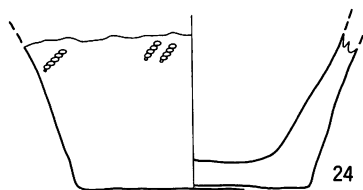
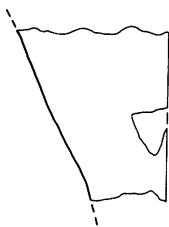
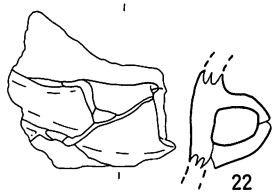
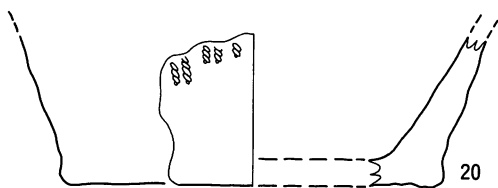
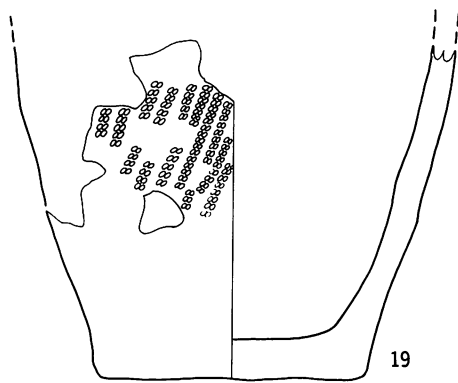
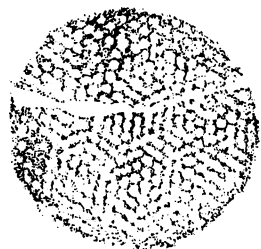
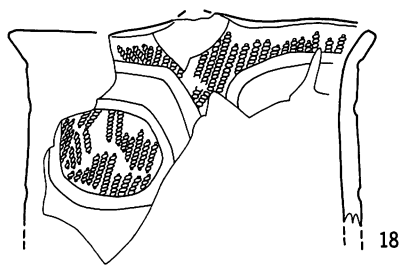
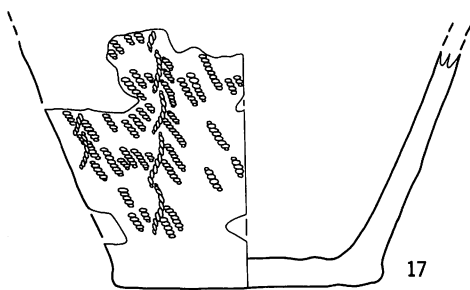
第20图 遺構内出土遺物(2)

湾台Ⅱ遺跡縄文土器観察表

図版番号	出土地点・層位	器種	部位	文 様 の 特 徴 ・ 器 形		備 考	写図番号
				文 様	器 形		
21-17	L 11 区 II層	深鉢	体～底	単節縄文、綾絡文、底面に網代痕	底径 10.7 cm	色調 10 YR 7/3	6-17
21-18	L 11 区 II層	深鉢	口～体	口縁は波状で外反、沈線区画文、地方は単節縄文		色調 7.5 YR 6/2	6-18
21-19	L 11 区 II層	深鉢	体～底	複節斜縄文	底径 10.4 cm	色調 10 YR 7/3	6-19
21-20	L 10～12 区 II層	深鉢	底部	単節縄文		色調 10 YR 7/3	6-20
21-21	L 11 区 II層	深鉢	底部	無文	底径 10.0 cm	色調 7.5 YR 7/4	6-21
21-22	M 13 トレンチ II層			把手			7-22
21-23	J 10 区	深鉢	体部	無文		色調 10 YR 7/4	6-23
21-24	Q 25 区	深鉢	底部	単節縄文	底径 9.0 cm	色調 10 YR 7/4	6-24
22-27	L 11 区 II層	深鉢	口縁部	沈線文、磨消縄文			7-27
22-28	Q 25 区	深鉢	体部	沈線文、磨消縄文			7-28
22-29	D 区 I層	深鉢	体部	沈線文、押し引き(半截竹管)			7-29
22-30	J 25 区	深鉢	口縁部	沈線文、磨消縄文			7-30
22-31	M 11 区 II層	深鉢	体部	沈線文、磨消縄文			7-31
22-32	J 11 区	深鉢	口縁部	沈線文、磨消縄文、波状口縁			7-32
22-33	L 11 区	深鉢	体部	竹管刺突			7-33
22-34	M 13 トレンチ II層	深鉢	口縁部	単節縄文			7-34
22-35	L 12～13 区 II層	深鉢	体部	沈線文、磨消縄文			7-35
22-36	M 25～26 区	深鉢	体部	単節縄文			7-36
22-37	M 11 区		口縁部	単節縄文			7-37
22-38	D 区 I層	深鉢	体部	条痕文			7-38
22-39	M 25 区		体部	沈線文、磨消縄文、刺突			7-39
22-40	M 13 トレンチ II層		体部	隆沈線、磨消縄文			7-40
22-41	M 7 トレンチ	深鉢	体部	沈線文			7-41
22-42	M 10 トレンチ II層		体部	隆帯、刻み			7-42
22-43	L 11 区 II層	深鉢	体部	沈線文、磨消縄文			7-43
22-44	MN 25・26 区	深鉢	体部	沈線文、竹管刺突			7-44
22-45	M 11 区 II層	深鉢	体部	隆沈線、磨消縄文			7-45
22-46	L 10～12 区		底部	底面網代痕			7-46

湾台Ⅱ遺跡石器観察表

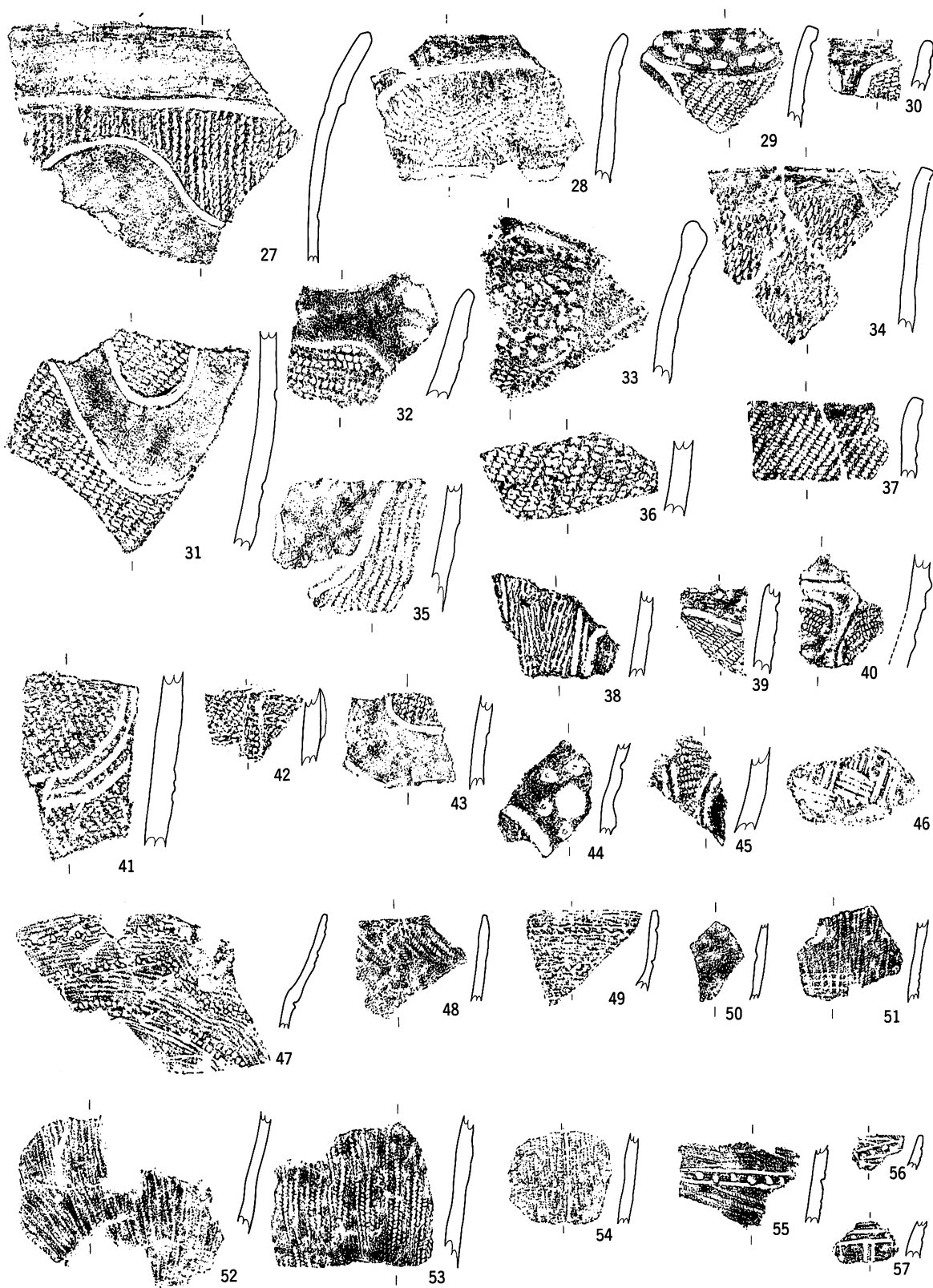
図版番号	遺 構 名	出 土 地 点	器 種	計 測 値				石 質	写図番号
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g		
19-8	P 24 住		磨石	11.1	8.2	5.8	740	石英閃緑岩	6-8
19-9	P 24 住		石皿	16.6	21.1	3.8	2180	石英閃緑岩	6-9
19-10	P 24 住		石鏃	2.9	1.7	0.4	1.3	粘板岩	6-10
19-11	P 24 住		磨製石斧	3.6	1.7	0.7	6.25	凝灰岩	6-11
19-12	P 24 住		石核	2.1	1.5	1.0	2.7	珪質泥岩	6-12
19-16	P 24 土坑		搔器等	2.6	1.6	0.65	1.9	珪質泥岩	6-16
19-78	J 31 土坑No.2	埋土下位	磨石	10.8	7.2	5.4	680	石英閃緑岩	6-78
22-58	遺構外	M 26 区III層	石鏃	2.0	1.7	0.3	0.65	珪質泥岩	8-58
22-59	遺構外	K 12 区II層	石鏃	1.8	1.4	0.3	0.7	粘板岩	8-59
22-60	遺構外	L 25-26 トレンチII層	石匙	2.8	5.0	0.8	6.7	凝灰岩	8-60
22-61	遺構外	I 25 区II層	搔器等	1.9	2.0	0.6	1.6	凝灰岩	8-61
22-62	遺構外	M 12 トレンチII層	搔器等	3.2	2.9	0.6	4.55	珪質泥岩	8-62
22-63	遺構外	M 10 区I層	砥石	3.1	1.9	1.5	9.5	凝灰岩	8-63
22-64	遺構外	M 7 区 トレンチ	搔器等	3.0	2.6	0.4	3.5	粘板岩	8-64
22-65	遺構外	表土	搔器等	3.3	2.0	0.9	4.3	凝灰岩	8-65
22-66	遺構外	M 12 区 トレンチII層	搔器等	3.0	2.9	0.6	7.3	粘板岩	8-66
22-67	遺構外	表土	搔器等	5.2	4.3	1.4	26.3	珪質泥岩	8-67
22-68	遺構外	L 11 区II層	搔器等	2.4	4.4	0.9	9.5	粘板岩	8-68
22-69	遺構外	K 10 区II層	搔器等	1.6	2.1	0.4	1.2	珪質泥岩	8-69
22-70	遺構外	L 11 区	搔器等	3.4	3.1	0.5	4.5	粘板岩	8-70
22-71	遺構外	Q 24 区 I層下位	磨製石斧	7.8	5.1	2.5	160	凝灰岩	8-71
23-72	遺構外	D 区	磨石	12.7	7.0	6.1	840	石英閃緑岩	8-72
23-73	遺構外	I 25 区II層	磨石	8.6	6.4	3.6	300	石英閃緑岩	8-73
23-74	遺構外	D 区	磨石	11.0	8.8	5.5	790	石英閃緑岩	8-74
23-75	遺構外	Q 24 区II層	敲石	10.1	6.6	4.0	390	石英閃緑岩	8-75
23-76	遺構外	D 区	磨石	15.1	9.4	6.4	1340	石英閃緑岩	8-76
23-77	遺構外	J 31 区II層	磨石	12.8	8.3	4.8	840	石英閃緑岩	8-77



第21図 遺構外出土遺物（土器）

S = 1/3





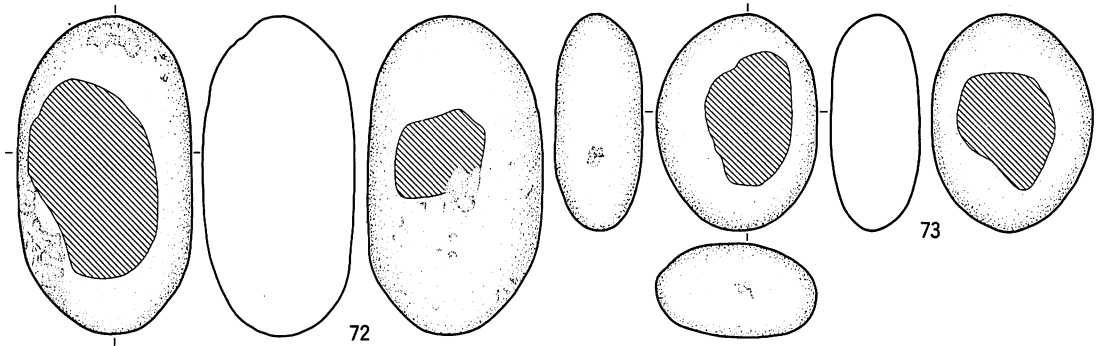
第22图 遺構外出土遺物 (土器)

S = 1/3



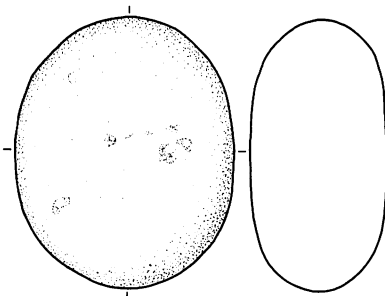
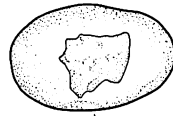
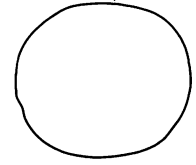
第23図 遺構外出土遺物 (石器)

S = 1/2

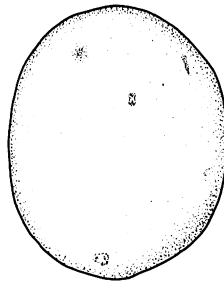


72

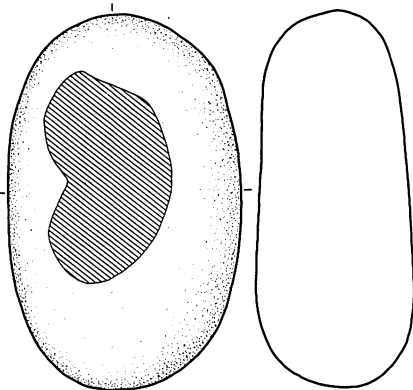
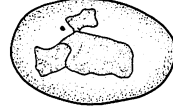
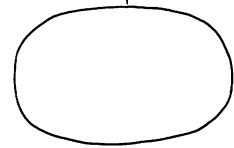
73



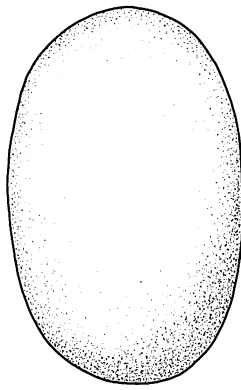
74



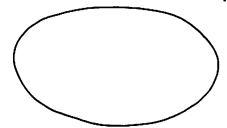
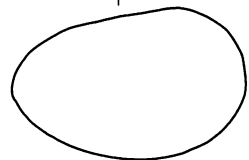
75



76



77



第24図 遺構外出土遺物（石器）

S = 1/3

## 2 まとめ

調査によって得られた情報に若干の考察を加え、まとめとする。検出された遺構は全て当初設定された調査区外からのもので、そのため大半が重機による削平をうけていた。

検出された竪穴住居跡は1棟であるが、この住居跡の立地状況から推測すると、調査区外へ続いている高位面に同遺構が存在するものと考えられる。したがって調査区中央部の低位斜面黒色土中から出土した土器はこれらの場所から流れ込んだものと思われる。遺構外出土の縄文土器は、殆ど縄文時代中期末葉、大木10式である。

調査区北端の尾根の頂上部で、3基並んで検出された土坑は、いずれも地山を掘り込んで構築されている。遺構内からの遺物は磨石1個のみで、周辺区域からの出土も皆無である。このため遺構の用途及び所属時期は不明である。

調査区中央部北側の南向斜面に位置する3基の焼土は、周辺同位面から弥生土器が出土していることから弥生時代の可能性が高い。出土した弥生土器は破片のため器形がつかめないものが多いが、文様等から全て同時期、小田野(1987)<sup>注1)</sup>によるところのV期に比定できる。

調査区西端のB21区・B22区で検出された土坑は周辺で少量の鉄滓が出土していることと、1基の土坑埋土から羽口と大型流動滓が出土したことから、鉄生産に関連する遺構の可能性はある。隣接する湾台III遺跡で古代の鉄生産遺構が発見されたことから関連性が考えられるし、調査区外に炉跡の存在が予想される。

調査区中央部北側の南向き斜面で検出された集石は、斜面の段差が付く縁に沿って検出されたため、当初土留めのためのものと考えたが、一部分のみの出土であることと、出土層位が盛土の下位に当たることなどから、むしろ同じ地区で検出された弥生時代の遺構と考えられる焼土と同時期の可能性も否定できない。

今回の調査によって本遺跡は縄文時代、弥生時代、それに古代?(鉄生産)の複合遺跡であることが明らかになった。発見された遺構数は少ないものの沿岸部における遺跡立地の傾向等の資料は、今後増加する当地域の調査に役立つものと思う。

注1) 小田野哲憲 1987年 「岩手の弥生土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第5号  
《参考文献》

岩手県立博物館 (1982)『岩手の土器』

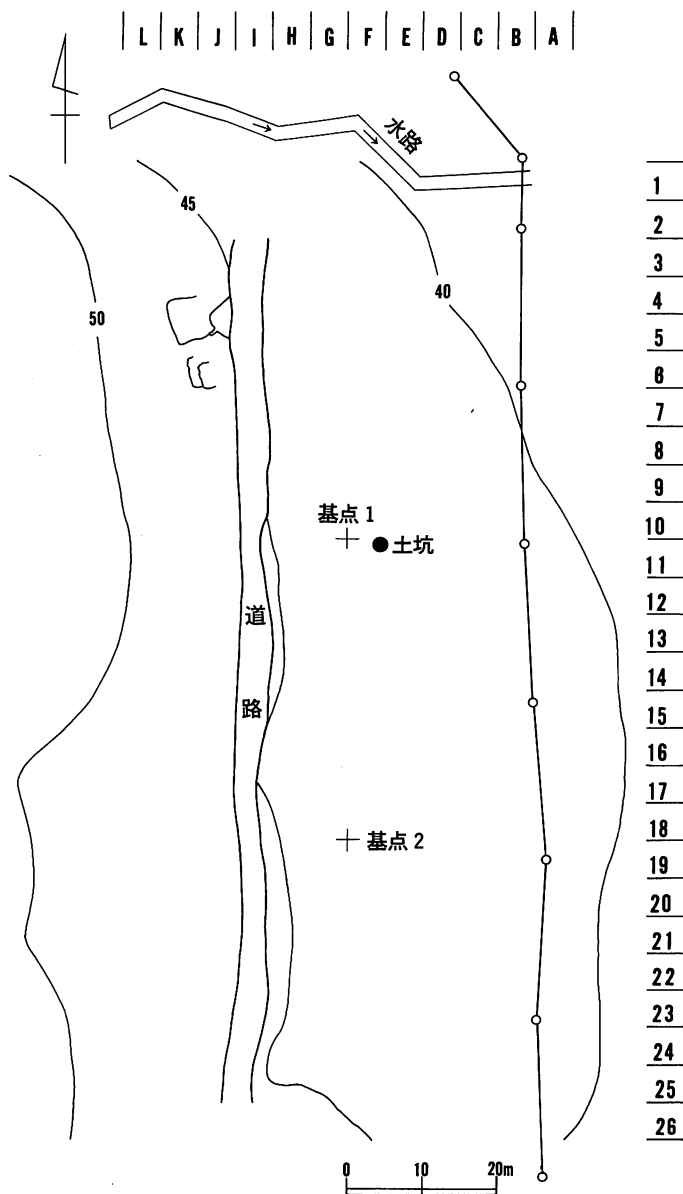
財団法人岩手県埋蔵文化財センター(1980)『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書(つなぎIII)』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第13集

岩手県文化振興事業団 (1992)『細浦I遺跡・細浦II遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第169集

## V 湾台Ⅲ遺跡

### 1 検出された遺構と出土遺物

湾台Ⅲ遺跡から検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、住居跡状遺構2基（鉄生産関連炉1基を含む）、土坑1基、集石遺構1か所である。出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器、羽口、鉄滓等である。



第25図 湾台Ⅲ遺構配置図



(1) 住居跡

J 5 住居跡 (第 26 図、写真図版 10)

〈検出状況〉 調査区北西部 J 5 区で西側に位置する K 5 住居跡状遺構と一部重複する。半分以上は南北方向に調査区を走る木材搬出用道路によって削平されている。上部に後述の K 5 集石遺構が南北方向に並んでおり、当初この住居跡の存在が分からなかったが、集石を精査終了後取り上げたところ焼土が出土して、住居跡の確認に至った。焼失住居跡である。

〈平面形・規模〉 残存が 1/3 程度のため、平面形・規模は不明である。

〈埋土〉 埋土は 3 層に分けられる。

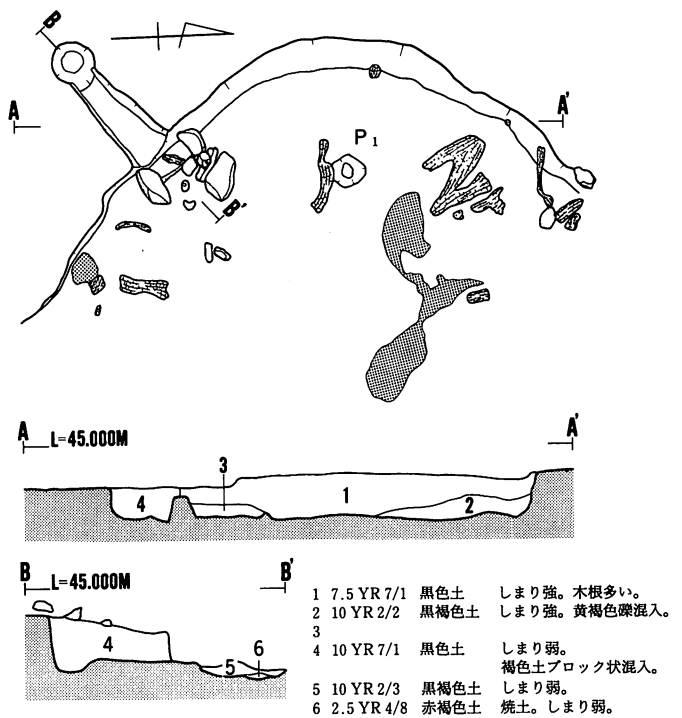
部分的に埋土中に多量の焼土の混入が見られた。

〈壁〉 残存する西側壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。壁高は西壁隅で 50 cm である。南側は斜面のため浅くなっている。

〈床〉 床面は平坦である。多量の焼土と炭化材が床直から出土している。

〈柱穴〉 P<sub>1</sub> 1 個検出した。規模は径 24×22 cm、深さ 27 cm である。

〈カマド〉 カマドは南西壁に設けられている。左右の袖に芯にした大きい礫が残存していた。燃烧部から土製支脚が出土した。煙道は半地下式の溝状のもので、南西壁に直角方向にのびている。長さ 110 cm、幅 24~40 cm、深さ 24~27 cm である。



第26図 J 5 住居跡 S=1/60

出土遺物 (第 32 図、写真図版 14)

土器器： 坏形土器は 1~4 の 4 点出土しており、全てロクロ使用成形である。ロクロからの切離しは、確認できるもの全て回転糸切りである。内面が黒色処理されている 2 と 4 は、同一個体と思われる。甕形土器は 6~8 の 3 点であり、全てロクロ不使用成形のものである。7 は口縁部が短く外反し、体部内外面をヘラケズリで調整されている。

羽口： 9・10 がカマド内から出土した。

土製支脚： 11・82 がカマド燃烧部中央で出土した。

## (2) 住居跡状遺構

### K 5 住居跡状遺構 (第 27 図、写真図版 11)

〈検出状況〉J 5 住居跡の西側にあり、一部重複する。南側 2 m に J 6 住居跡状遺構が緩斜面に沿って並ぶ。南側は斜面のため一部流出し、その上に集石がのっていた。西壁に沿って浅い周溝が 1 条検出されている。

〈平面形・規模〉東壁が確認できなかったため、平面形は不明である。西壁は長さ 6 m で両隅は隅丸形を呈する。

〈埋土〉埋土は検出面では黒色土 1 層である。南側に残した土層観察用ベルトでは 2 層に分かれる。

〈壁〉西壁中央部での壁高は 8 cm である。

〈床〉床面はほぼ平坦である。残存している壁の周辺で、大小多数の礫が出土している。

〈柱穴〉P<sub>1</sub>の 1 個が検出された。規模は径 20 cm である。

〈炉跡〉東側中央部で地床炉と思われる炉跡が検出された。焼土は長径 110 cm、短径 80 cm の不整形円形状に広がっているが、燃焼部の掘り込み規模は 50~70 cm、深さ 10 cm である。

### 出土遺物 (第 33・34 図、写真図版 14)

**土師器**：坏形土器は 12~14 の 3 点の出土である。13 と 14 は胎土等から同一個体と思われる。これらはいずれもロクロ使用成形のもので、内面は黒色処理されている。14 は高台付で高台の高さは 0.8 cm で、底部外面中央部に回転糸切り痕が見られる。甕形土器は 15・16 の破片 2 点の出土で同一個体の可能性がある。ロクロ不使用成形のものである。

**須恵器**：17 の甕形土器破片 1 点が出土した。内面に当て具痕、外面に叩き具痕をもつ。

**羽口**：羽口は 18~23 の 6 点の出土である。18~21 は先端部の一部で溶着滓が付着している。

**鉄滓**：埋土と床面から出土した。床面からの出土は 4 kg である。

**石器**：25~29 の礫石器 5 点が出土した。

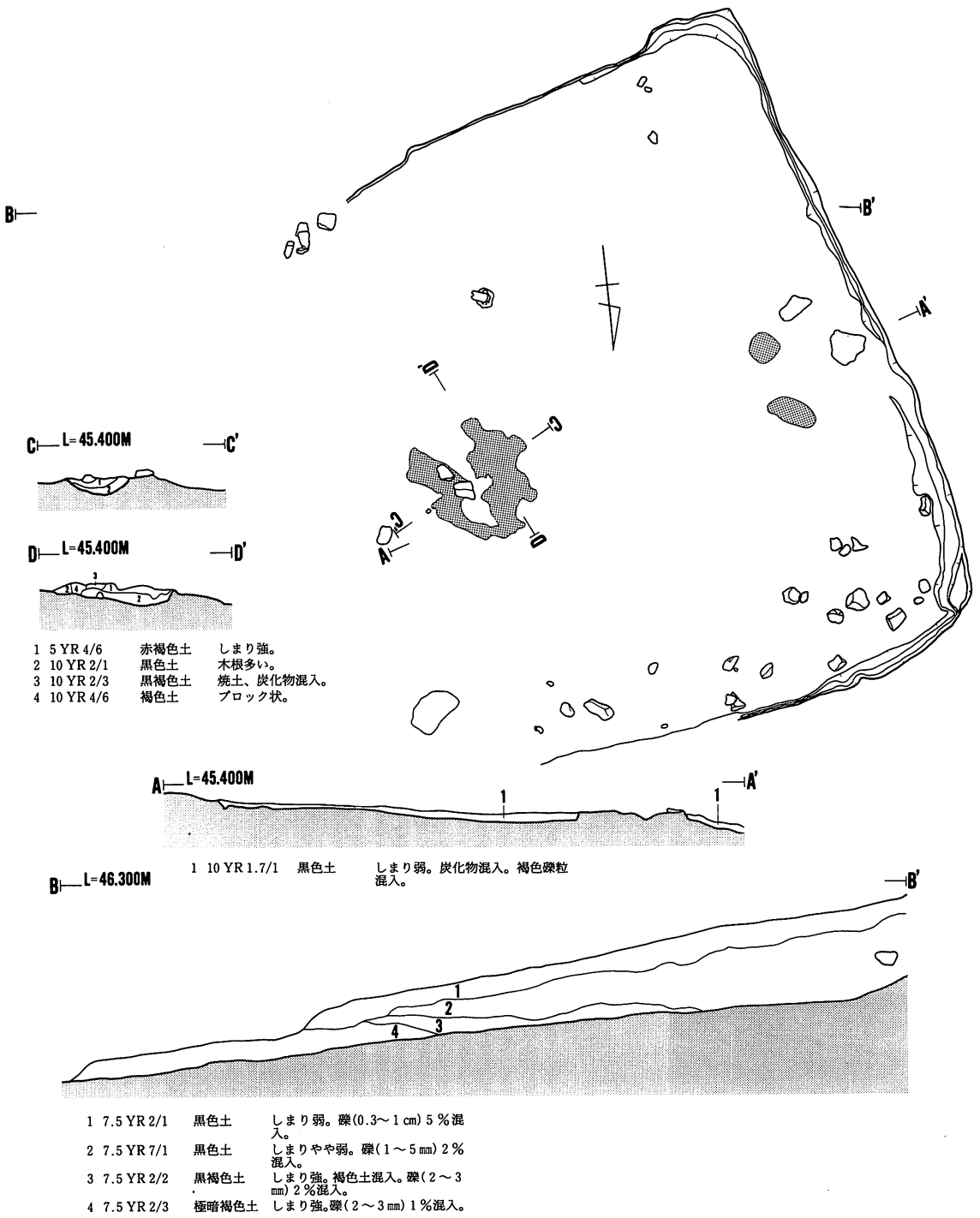
### J 6 住居跡状遺構・製鉄関連炉 (第 28 図、写真図版 12)

〈検出状況〉K 5 住居跡状遺構の約 2 m 南側に位置し、西側斜面下方約 2 m には木材搬出用道路がある。住居跡状の掘り込みが重複するように 2 段確認されたが、新旧差は認められなかった。したがって一つの遺構として扱った。現存する壁は斜面上方になる西壁と南・北壁の一部だけである。

〈平面形・規模〉斜面を 2 段に掘り込んで平坦面を作り出しているが、西側上位の西壁は長さ 420 cm である。下位の西壁は長さ 352 cm である。

〈埋土〉検出面からの埋土は黒色土 1 層である。

〈壁〉上位西壁は壁高 15 cm、下位西壁は壁高 20 cm である。



第27図 K 5 住居跡状遺構 S=1/60

〈床〉平坦であるがやや東向きに傾斜している。

〈柱穴・小土坑〉P<sub>1</sub>～P<sub>10</sub>の10個が検出された。規模は計測表に示す。

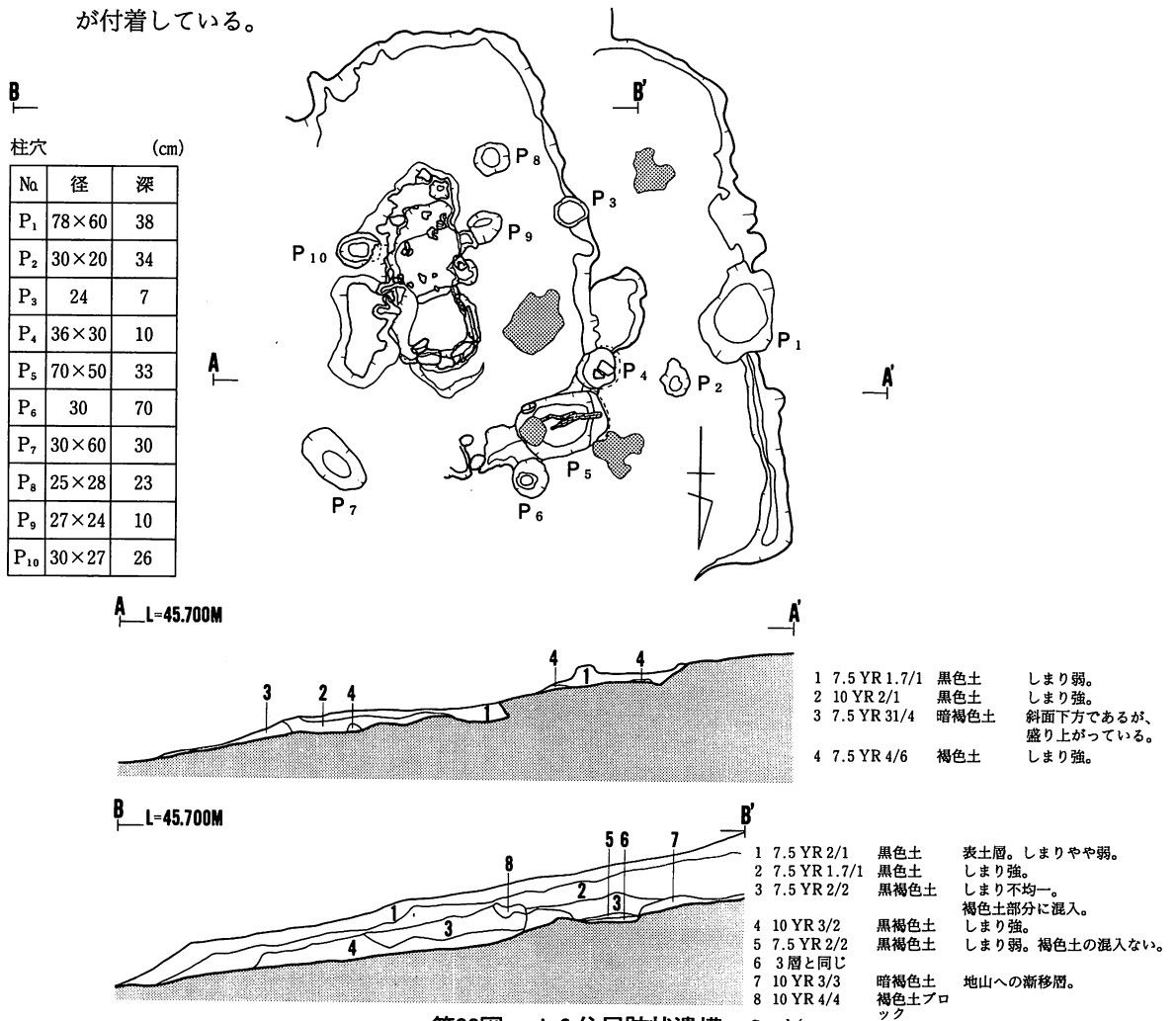
〈炉跡〉(第29図、写真図版13)中央部で製鉄関連炉1基検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長径168cm、短径70cmである。この炉跡は構造上から二つに分けられる。一つは北側の石で囲ってある部分で、平面形が円形で断面形がピーカー状を呈する。石とともに、接している壁面も熱変している。埋土でも南側と差異が見られる。

出土遺物(第34・35図、写真図版15)

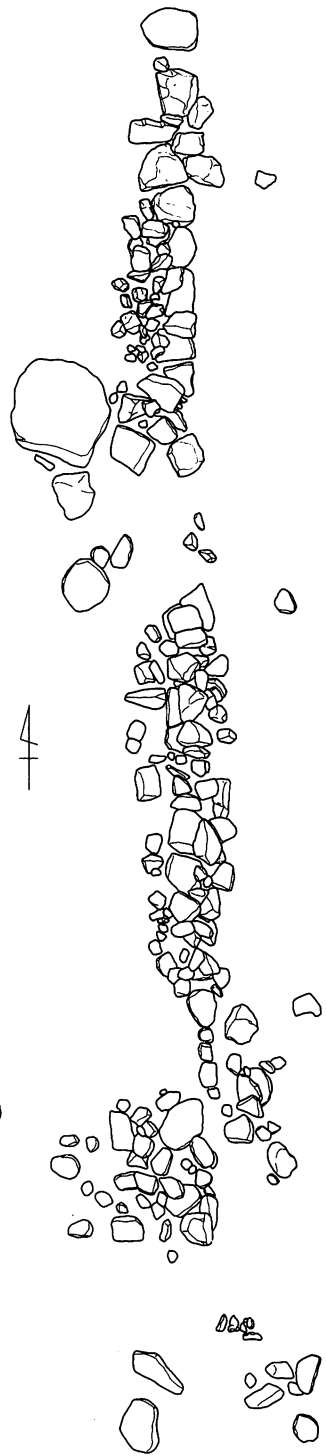
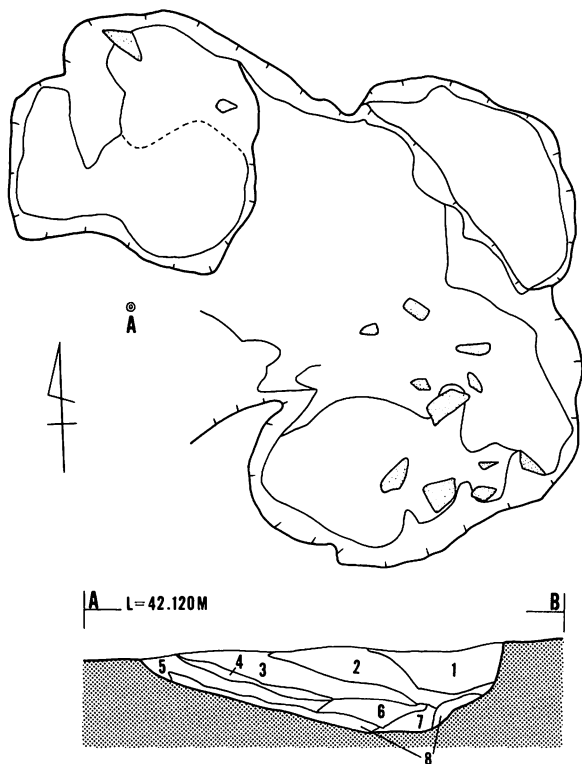
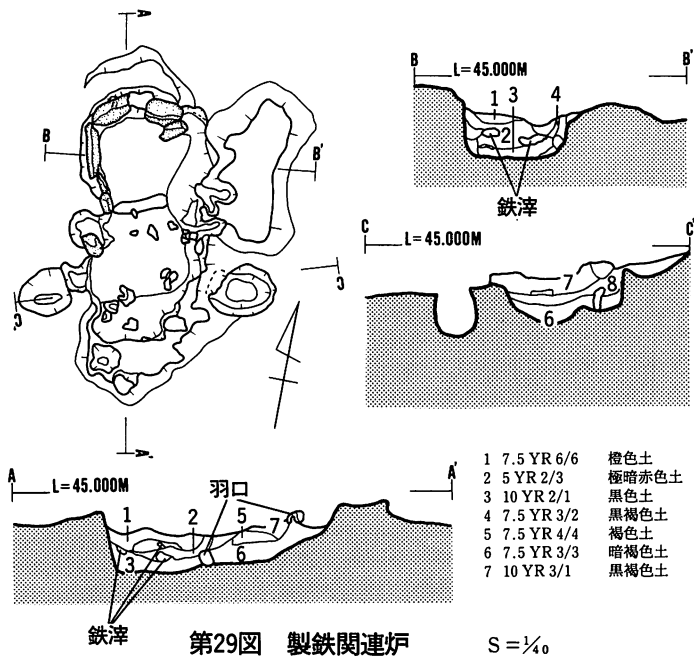
土師器：30・31は甕形土器の破片で、ともにロクロ不使用成形である。

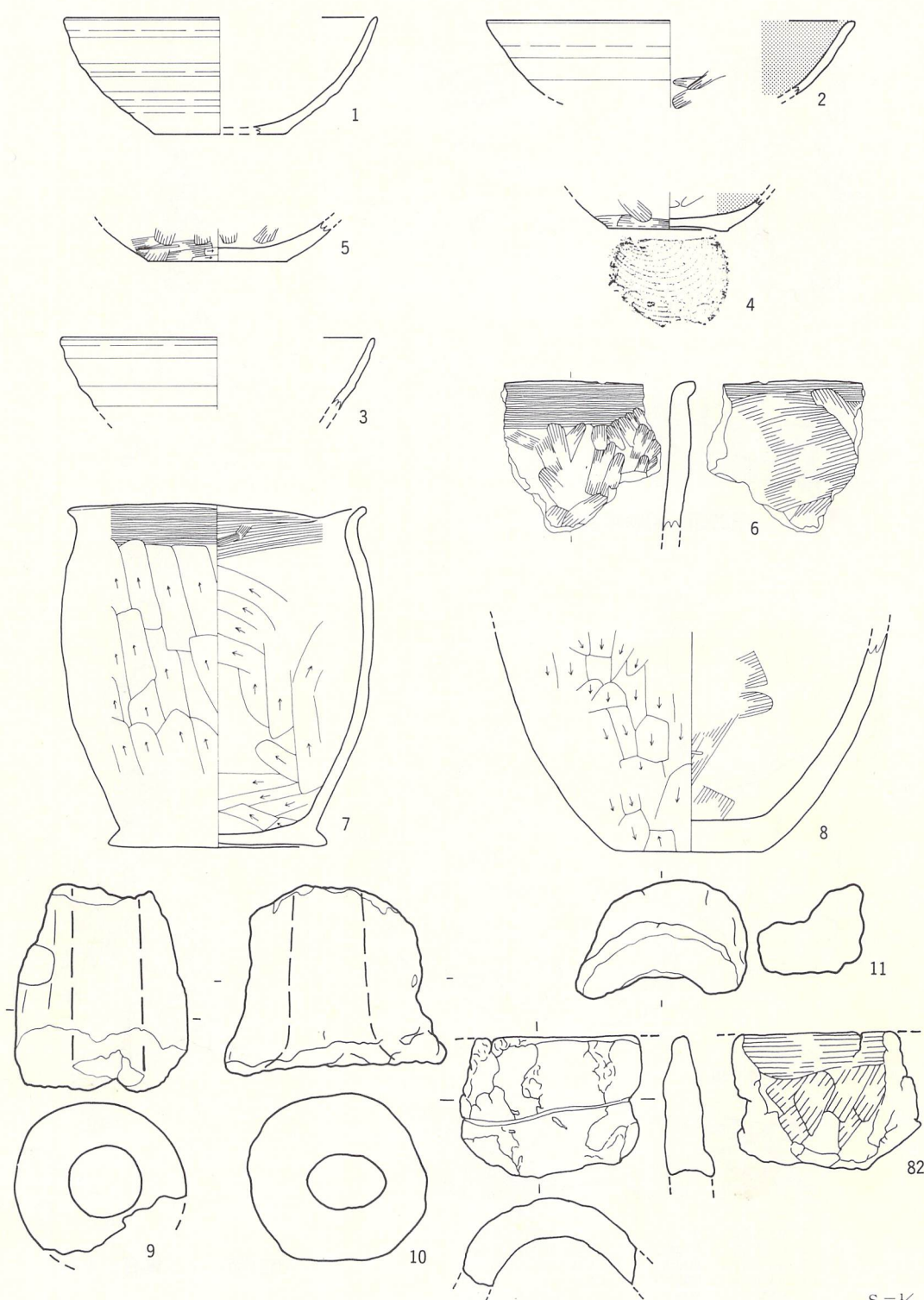
須恵器：32～34は外面に叩き具痕、内面に当て具痕のある甕形土器片で床面から出土した。

羽口：羽口は炉跡内と周辺部、P<sub>1</sub>から出土した計3点を掲載した。45・46は先端部に溶着滓が付着している。



第28図 J 6 住居跡状遺構 S=1/60

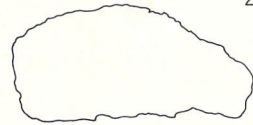
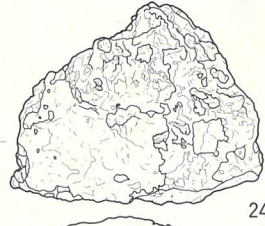
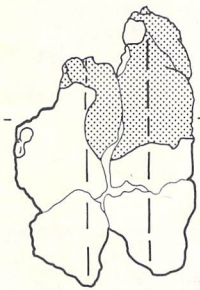
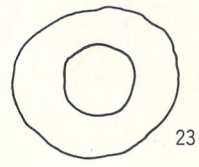
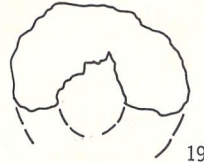
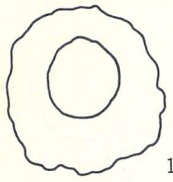
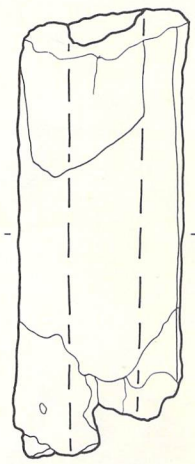
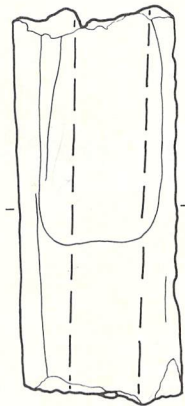
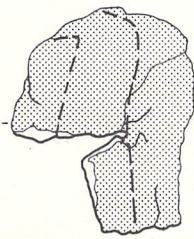
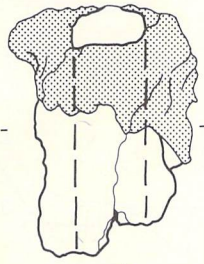
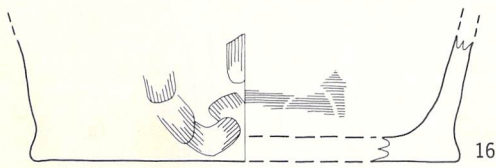
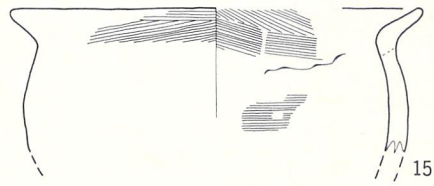
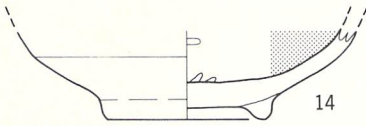
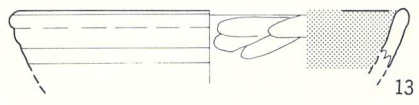
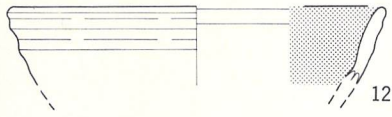




第32図 遺構内出土遺物 (J 5 住居跡)

S = 1/3





18

19

22

23

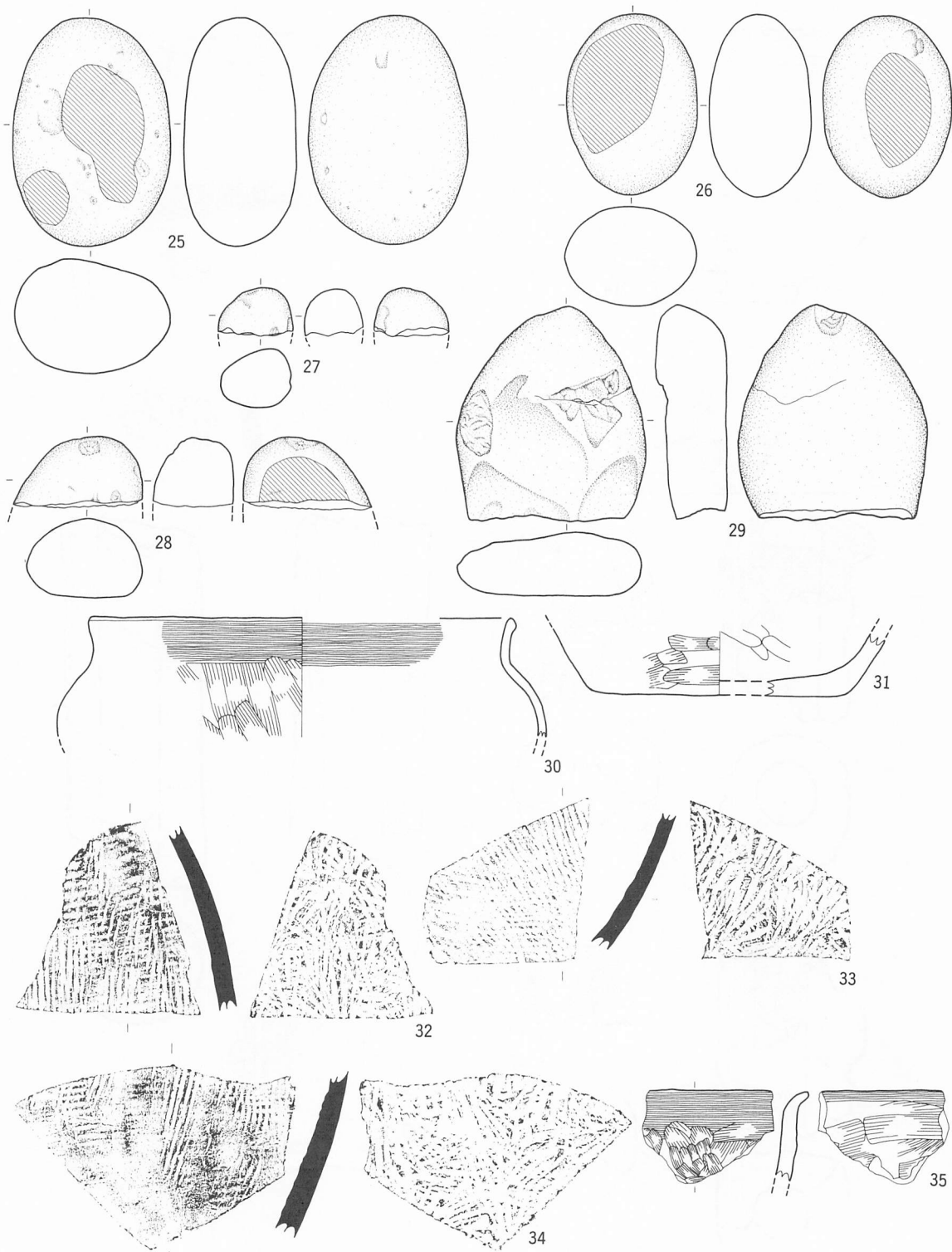
20

21

24

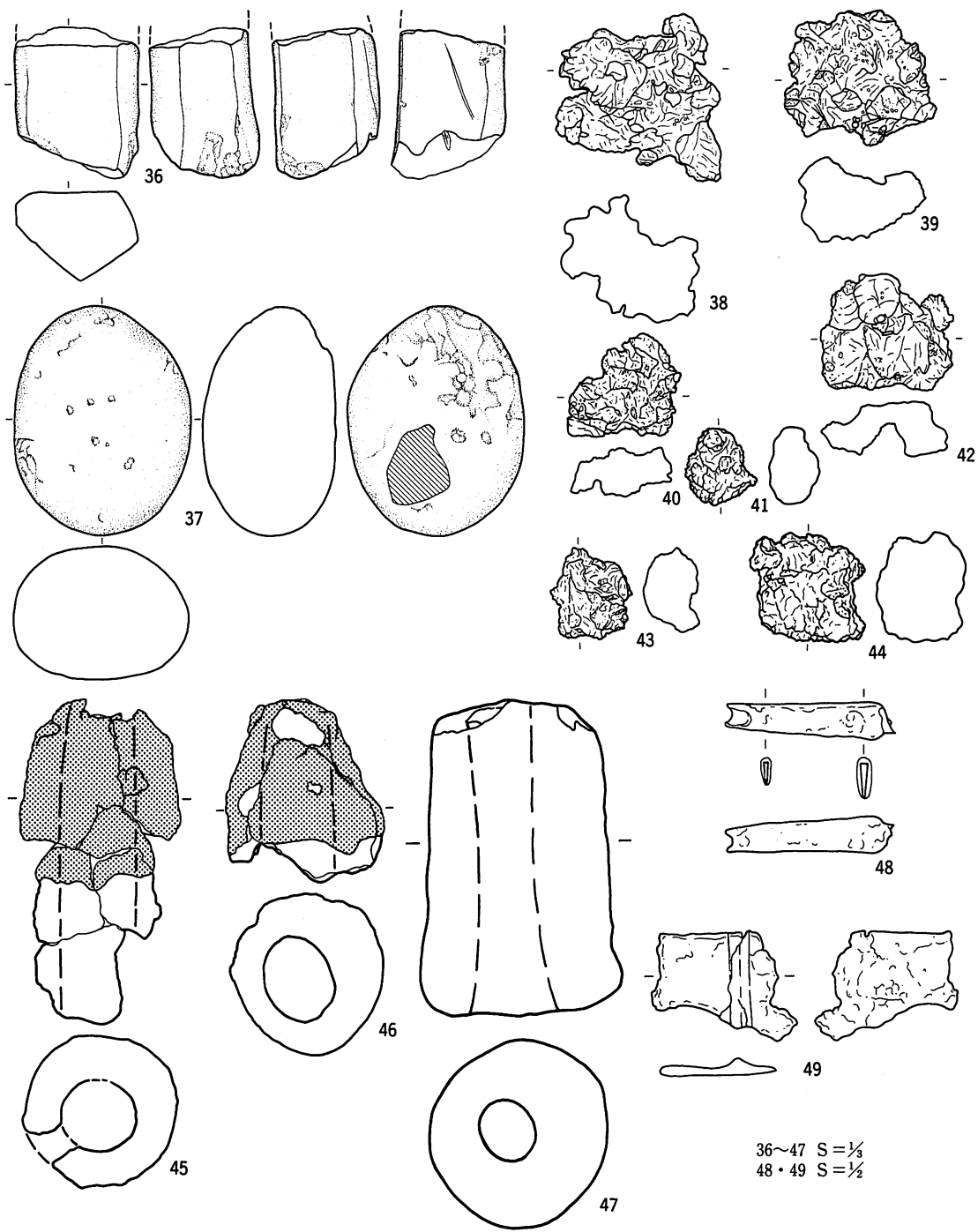
S = 1/3

第33図 遺構内出土遺物 (K 5 住居跡)



第34図 遺構内出土遺物

S = 1/3



第35図 遺構内出土遺物

鉄製品：炉跡から2点出土した。48は刀子の欠損品と思われる。49は鉄製品の一部と思われるが判別できない。この2点は分析を依頼しているので附編に結果を掲載した。

鉄滓：38～44は炉内埋土中から出土した7点である。これらも分析試料としたので附編に結果を掲載した。

### (3) 土坑

#### E 11 土坑 (第 30 図、写真図版 9)

調査区北東寄りの E 11 区に位置する。検出面は IV 層褐色土上面である。平面形は不整形を呈し、規模は長径 350 cm、短径 130 cm、深さ中心部で 40 cm である。底面は複数の窪みが見られるとともに多くの礫が出土した。

埋土は 8 層に細分される。黒色、黒褐色土が主体で黄褐色、褐色土の混入が各層に見られる。出土遺物はない。

### (4) 集石遺構

#### J 5 集石 (第 31 図、写真図版 13)

調査区の北西部 J 5 区、J 4 区、J 3 区に位置し、一部 K 5 住居跡状遺構、J 5 住居跡と重複する。表土面からも大型礫は確認できたが、その他大小多量の礫が緩斜面の等高線にほぼ平行(南北方向)に長さ 13 m、幅 0.6～1.5 m の範囲に集中して出土した。最大のものは径 70 cm を測る。まとまった礫の出土は表土層(黒色土)からの出土で下位層からは見られなかった。礫に混じて鉄滓が数点出土した。35 は土師器甕形土器の口縁部破片であるが、J 5 住居跡出土の 6 と同一個体と思われる。

### (5) 遺構外出土遺物 (第 36～38 図、写真図版 16)

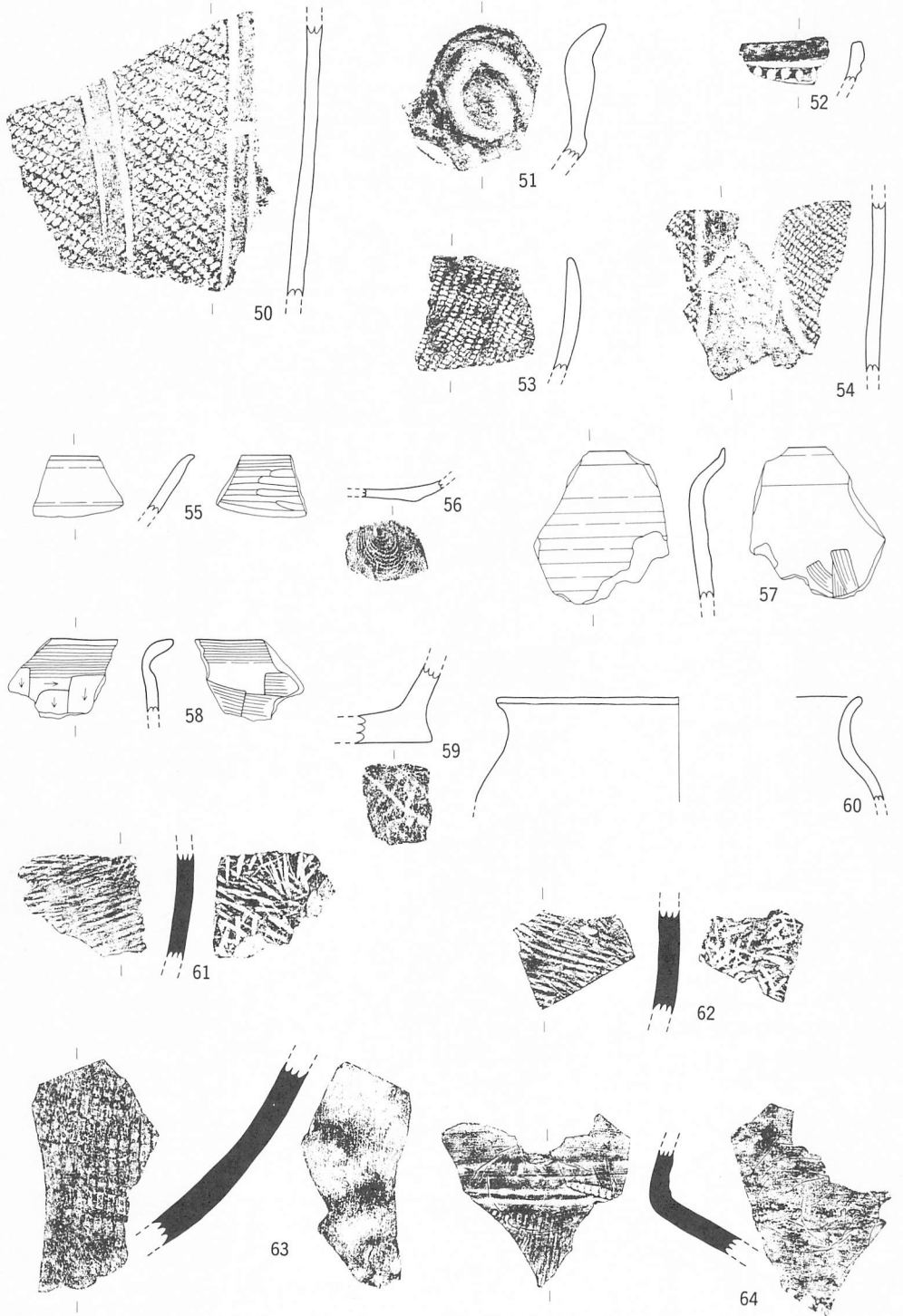
遺構外の出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器、鉄滓である。これらの総量は、縄文土器 5 点、土師器 2 袋、須恵器数点、石器 17 点、鉄滓コンテナ 5 箱の出土である。

#### ① 土器

縄文土器：縄文土器は調査区南側で出土したものである。いずれも破片であるが、文様等から縄文時代中期に属する。

土師器：土師器は住居跡等が検出された調査区北側斜面で出土した。殆んどが小破片のため、本報告書には 55～60 の 6 点掲載した。調整方法、胎土から住居跡内出土土師器と同時期のものである。

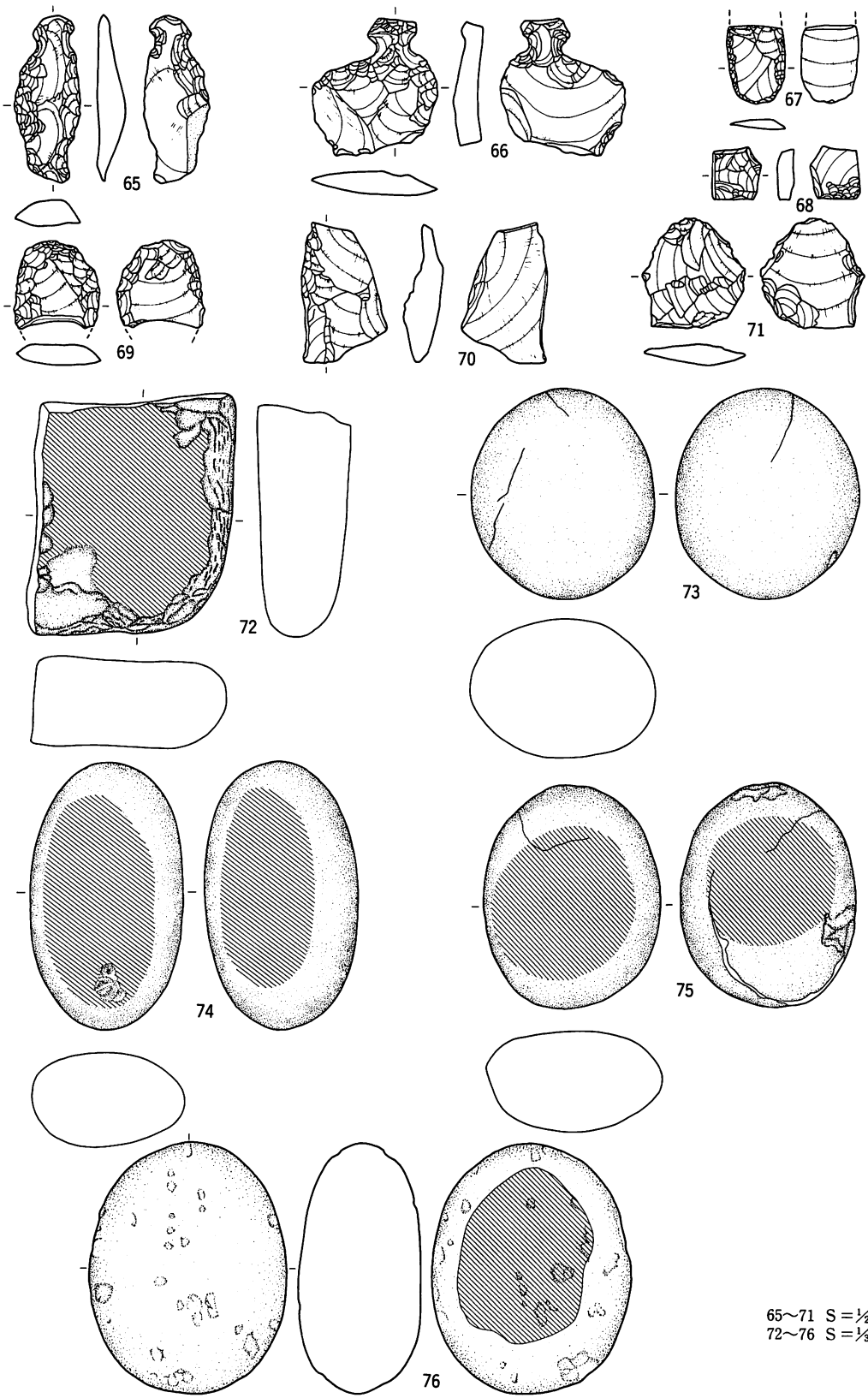
須恵器：須恵器は全て住居跡及び住居跡状遺構の上面に設定したトレンチからの出土で、これらの遺構に伴うものと考えられる。



S = 1/3

第36图 遺構外出土遺物 (土器)





65~71 S = 1/2  
 72~76 S = 1/3

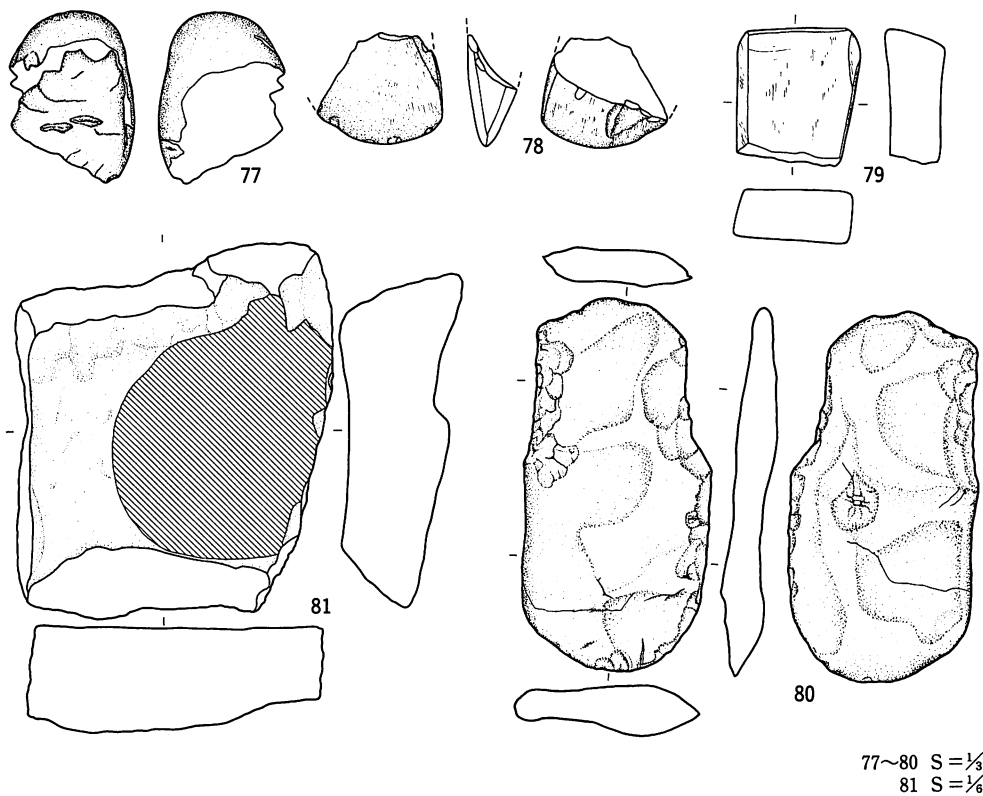
第37図 遺構外出土遺物

② 石器

石器の種類は剥片石器 7 点、磨製石器 1 点、礫石器 9 点である。

③ 鉄滓

鉄滓は調査区北側で検出された鉄生産関連炉の周辺と東側斜面上で、総量約 150 kg 出土した。



第38図 遺構外出土遺物

湾台川遺跡土器観察表

( ) 推定値

図版番号	遺構名	出土地点	種別	調整		底部外面	備考	法量 (m)			写図番号
				外面	内面			口径	底径	器高	
31-1	J5住		土師器 (坏)	ロクロ調整	ロクロ調整			(14.4)		5.4	14-1
31-2	J5住		土師器 (坏)	ロクロ調整	黒色処理			(17.0)			14-2
31-3	J5住		土師器 (坏)	ロクロ調整	ロクロ調整			(14.5)			14-3
31-4	J5住		土師器 (坏)		黒色処理	回転糸切り痕			5.5		14-4
31-5	J5住		土師器 (坏)			回転糸切り痕			6.4		14-5
31-6	J5住		土師器 (甗)	ヨコナ デ・ヘラ ナデ	ヨコナ デ・ヘラ ナデ						14-6
31-7	J5住		土師器 (甗)	ヨコナ デ・ヘラ ケズリ	ヨコナ デ・ヘラ ケズリ			13.8	9.8~ 10.4	15.7	14-7
31-8	J5住		土師器 (甗)	ヘラケズ リ	ヘラナデ				7.2		14-8
32-12	K5住状		土師器 (坏)	ロクロ調整	黒色処理			(15.0)			14-12
32-13	K5住状		土師器 (坏)	ロクロ調整	ヘラミガ キ・黒色 処理			(15.5)			14-13
32-14	K5住状		土師器 (坏)		黒色処理	回転糸切り痕			6.2		14-14
32-15	K5住状		土師器 (甗)	ヨコナデ	ヨコナデ			(16.2)			14-15
32-16	K5住状		土師器 (甗)	ヘラナデ					(17.0)		14-16
32-17	K5住状		須恵器 (甗)	平行叩き 具痕	当て具痕						14-17
33-30	J6住状		土師器 (甗)	ヨコナ デ・ヘラ ナデ	ヨコナデ			(20.0)			15-30
33-31	J6住状		土師器 (甗)	ヘラナデ	ヘラミガ キ				(12.2)		15-31
33-32	J6住状		須恵器 (甗)	平行叩き 具痕	当て具痕						15-32
33-33	J6住状		須恵器 (甗)	平行叩き 具痕	当て具痕						15-33
33-34	J6住状		須恵器 (甗)	平行叩き 具痕	当て具痕						15-34
33-35	J6住		土師器 (甗)	ヨコナ デ・ヘラ ナデ	ヨコナ デ・ヘラ ナデ						15-35
34-55	遺構外	第9トレン チ1層	土師器 (坏)	ロクロ調整	ロクロ調整 ・ヘラ ミガキ						16-55
34-56	遺構外	第2トレン チ2層	土師器 (坏)			回転糸切り痕					16-56
34-57	遺構外	第9トレン チ1層	土師器 (甗)	ロクロ調整	ロクロ調整 ・ヘラ ナデ						16-57
34-58	遺構外	G5区3 層	土師器 (甗)	ヨコナ デ・ヘラ ケズリ	ヨコナ デ・ヘラ ナデ						16-58
34-59	遺構外	Bトレン チ1層	土師器 (甗)			木葉区痕					16-59
34-60	遺構外	第9トレン チ1層	土師器 (甗)					(16.0)			16-60
34-61	遺構外	第9トレン チ1層	須恵器 (甗)	平行叩き 具痕	当て具痕						16-61
34-62	遺構外	第9トレン チ2層	須恵器 (甗)	平行叩き 具痕	当て具痕						16-62
34-63	遺構外	第9トレン チ1層	須恵器 (甗)	平行叩き 具痕							16-63
34-64	遺構外	Bトレン チ1層	須恵器 (甗)	平行叩き 具痕			口縁部ロクロ調整				16-64

湾台川遺跡石器観察表

図版番号	遺構名	出土地点	器種	計測値				石質	写図番号
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g		
34-25	K 5 住		磨石	11.1	7.8	5.5	650	石英閃緑岩	15-25
34-26	K 5 住		磨石	8.8	6.3	5.0	355	輝石安山岩	15-26
34-27	K 5 住			2.4	3.7	2.9	32	玉ずい	15-27
34-28	K 5 住		磨石	3.5	6.3	3.9	110	石英閃緑岩	15-28
34-29	K 5 住		凹石	10.4	9.8	3.6	480	硬砂岩	15-29
35-36	J 6 住状		砥石	6.9	4.9	5.0	190	流紋岩	15-36
35-37	J 6 住状		磨石	10.4	8.1	5.1	740	石英閃緑岩	15-37
37-65	遺構外	第9トレンチI層	石匙	5.1	2.1	0.8	7.8	流紋岩(はり質)	16-65
37-66	遺構外	第9トレンチI層	石匙	4.1	3.9	0.7	13.4	粘板岩	16-66
37-67	遺構外	H 3 区II層	搔器等	2.3	1.8	0.3	1.9	流紋岩(はり質)	16-67
37-68	遺構外	第8トレンチII層	搔器等	1.6	1.5	0.5	2.2	流紋岩(はり質)	16-68
37-69	遺構外	F 2 区II層	搔器等	2.5	2.7	0.7	7.1	凝灰岩	16-69
37-70	遺構外	第9トレンチI層	搔器等	4.4	2.5	1.1	11.5	粘板岩	16-70
37-71	遺構外	F 3 区I層	搔器等	3.4	3.2	0.7	8.3	流紋岩(はり質)	16-71
37-72	遺構外	表採	石皿	10.9	9.4	4.2	880	黒雲母片岩	16-72
37-73	遺構外	第8トレンチII層	磨石	9.8	8.6	6.5	750	デイサイト	16-73
37-74	遺構外	表採	磨石	12.5	7.1	4.4	610	硬砂岩	16-74
37-75	遺構外	表採	磨石	10.5	8.3	4.7	570	デイサイト	16-75
37-76	遺構外	表採	磨石	11.9	9.3	5.8	910	石英閃緑岩	16-76
38-77	遺構外	H 2 区I層	磨石	6.6	4.9	3.8	140	デイサイト	16-77
38-78	遺構外	第4トレンチIV層	磨製石斧	4.5	5.0	1.9	42.7	凝灰岩	16-78
38-79	遺構外	G 22 区II層	砥石	5.6	5.0	2.1	100	凝灰岩	16-79
38-80	遺構外	表採	打製石斧	15.0	7.6	2.0	290	流紋岩質凝灰岩	16-80
38-81	遺構外	表採	石皿	29.9	25.4	8.9	1000	石英閃緑岩	16-81

## 2 まとめ

検出された遺構数は少ないものの時期が特定できる鉄生産関連遺構が確認された。以下、調査によって得られた情報に若干の考察を加え、まとめとする。

1 基検出された鉄生産関連炉は作業場と考えられる住居跡状遺構内中央部に位置する。この住居跡状遺構は斜面を平坦に造成し、炉跡は地下を掘り込んで構築している。遺構内で柱穴状小土坑が検出されており、上屋構造物の存在も考えられる。炉体と思われる石で囲まれた部分は石と接する外側の壁が赤変している。炉底は平坦になっており、炉全体も傾斜は見られない。炉内からは複数の羽口片が出土しているが、使用個数、装着箇所を特定することができない。古代の鉄生産関連炉には製鉄炉（製錬炉）又は精錬炉が想定されるが、現時点ではどちらか断定できない。調査の中では鍛冶炉の可能性も考慮したが、鍛造剝片等鍛冶関係の遺物は見つかっていない。この炉跡の操業時期は、床面から出土した土師器、須恵器から10世紀代に位置づけられる。なお、この炉跡は岩手県立博物館で切り取り作業を行い、保存している。

前述遺構と約2 m離れた位置で検出された住居跡状遺構は、床面から土器類の他やはり羽口、鉄滓が出土している。このことから同時期の鉄生産に関連する遺構と思われる。

1棟検出された住居跡は出土遺物が鉄生産遺構と同時期のものであるが、遺構の一部が住居跡状遺構と重複しているため若干の時期差が考えられる。しかし、東側斜面で出土した鉄滓の中には大型流動滓も含まれており、調査区外に他の炉跡の存在が推測される。鉄生産に操業期間の幅を考慮にいれるならば、この住居跡が鉄生産工人の住居と考えることも可能である。

調査区北東寄りで検出された土坑1基は遺構内及び周辺からの出土遺物が皆無であり、時期、用途とも不明である。

調査区北西部で検出された集石遺構は表土面から確認でき、斜面の段差に沿って並べられていることから、土留めのためのもので、時期的にも新しいものと考えられる。

今回の調査によって本遺跡は、古代の製鉄関連遺跡であることが明らかになったが、炭窯等が検出されなかったことから、遺跡は調査区外にも広がっていることが推測される。不明な点の多い古代の鉄生産に貴重な資料を提供することができたが、今後検討しなければならない課題も多く残されている。

### 《参考文献》

- |          |  |
|----------|--|
| 岩手県立博物館  | (1982)『岩手の土器』                            |
| 秋田県教育委員会 | (1987)『堪忍沢遺跡発掘調査報告書』秋田県埋蔵文化財発掘調査報告書第152集 |
| 青森県教育委員会 | (1990)『空沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第        |

130 集

- 岩手県文化振興事業団 (1989)『夏本遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 134 集
- 宮古市教育委員会 (1984)『赤前遺跡群第 1 次・第 2 次発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書 5
- 宮古市教育委員会 (1988)『青猿 I 遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書 14



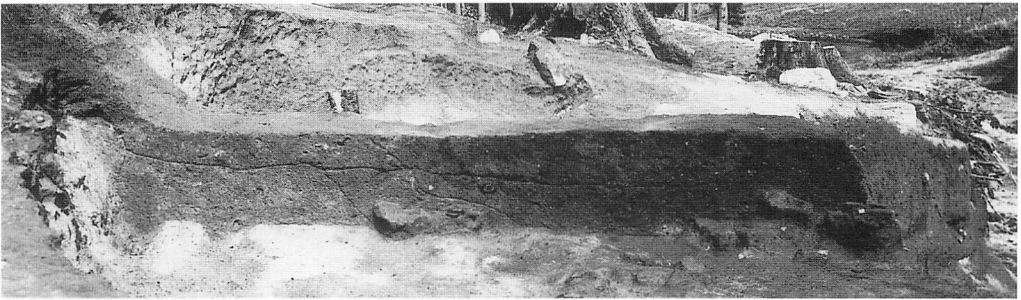
写 真 图 版



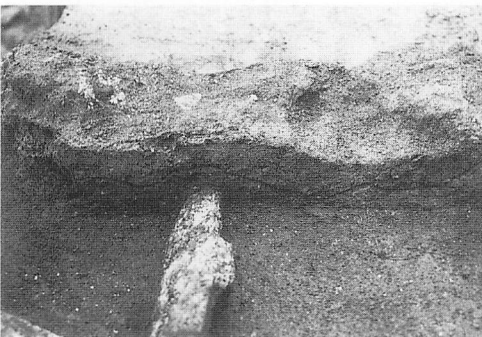
写真図版1 湾台II調査区全景



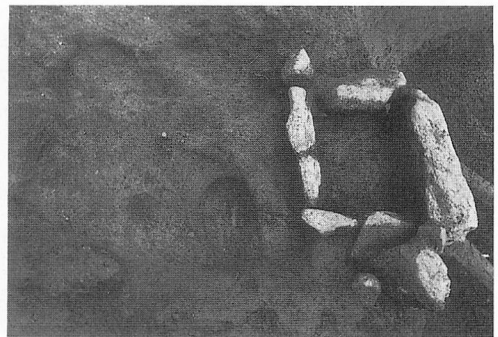
平面



南北断面



炉跡南北断面



炉跡平面

写真図版 2 P 24住居跡(1)



土器出土状況



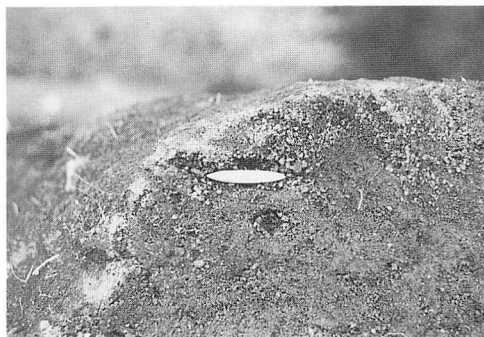
土器出土状況



土器出土状況



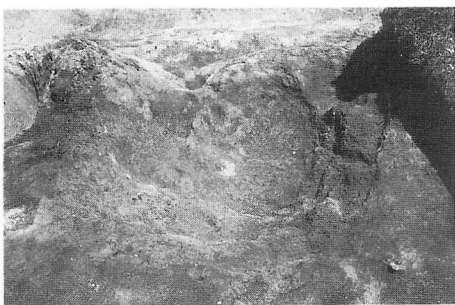
土器出土状況



石器出土状況

写真図版 3 P 24住居跡(2)





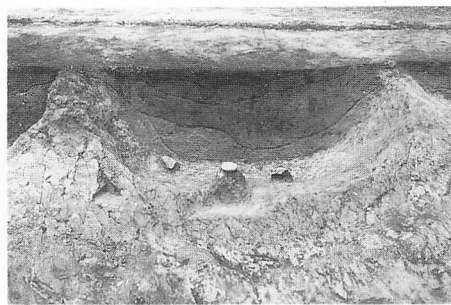
J 31土坑No. 1 平面



J 31土坑No. 1 断面



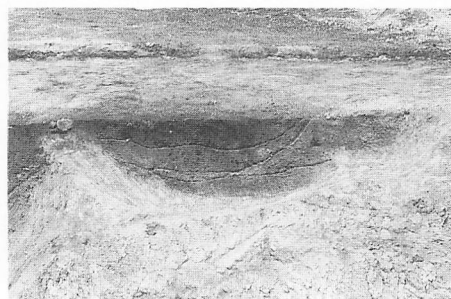
J 31土坑No. 2 平面



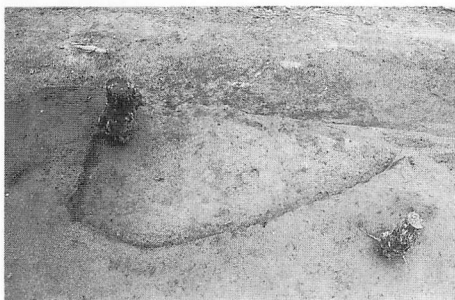
J 31土坑No. 2 断面



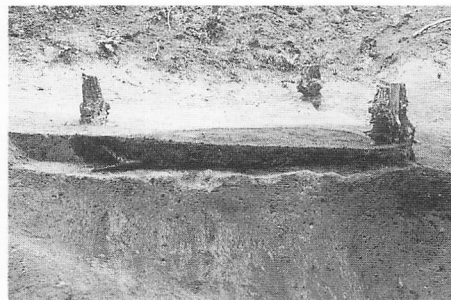
J 31土坑No. 3 平面



J 31土坑No. 3 断面



P 24土坑平面

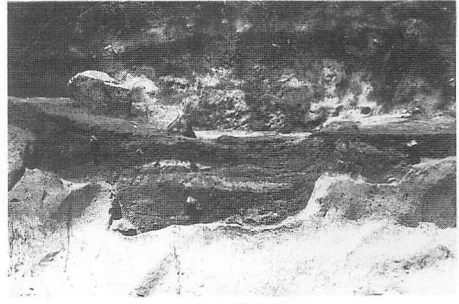


P 24土坑断面

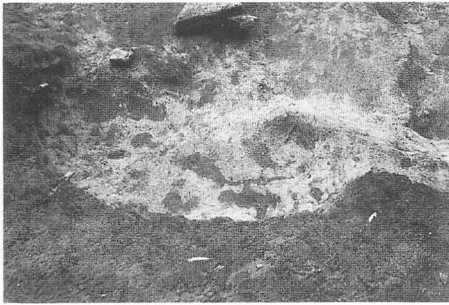
写真図版 4 湾台II土坑



B 21土坑断面



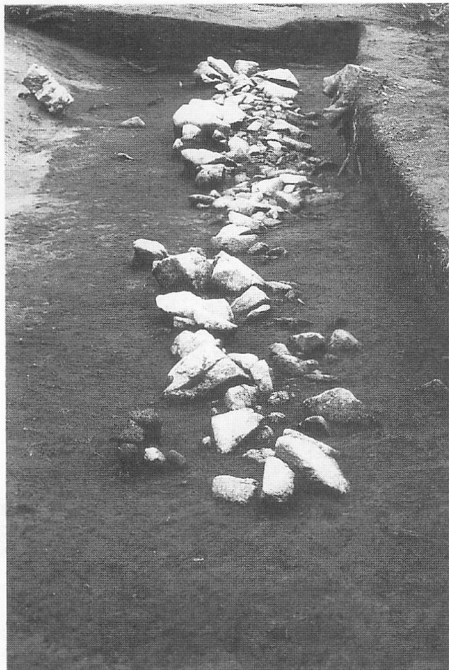
B 21土坑平面



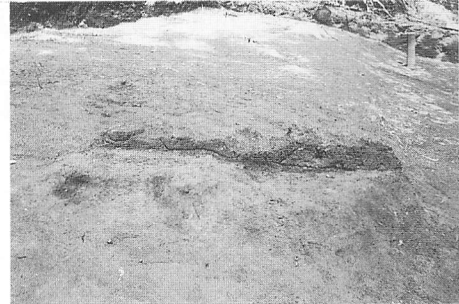
B 22土坑平面



B 22土坑断面



I 24集石平面



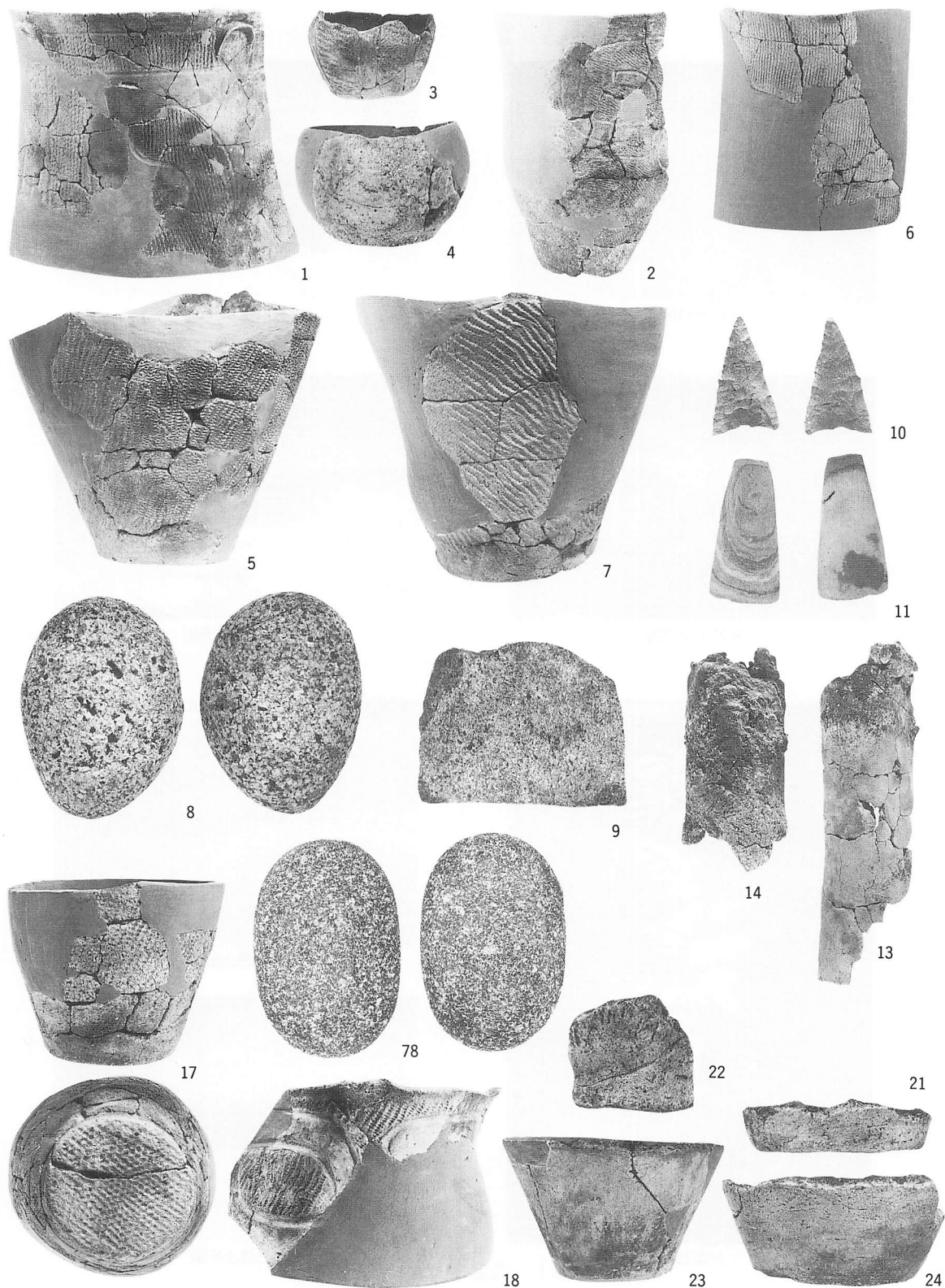
N 26烧土断面



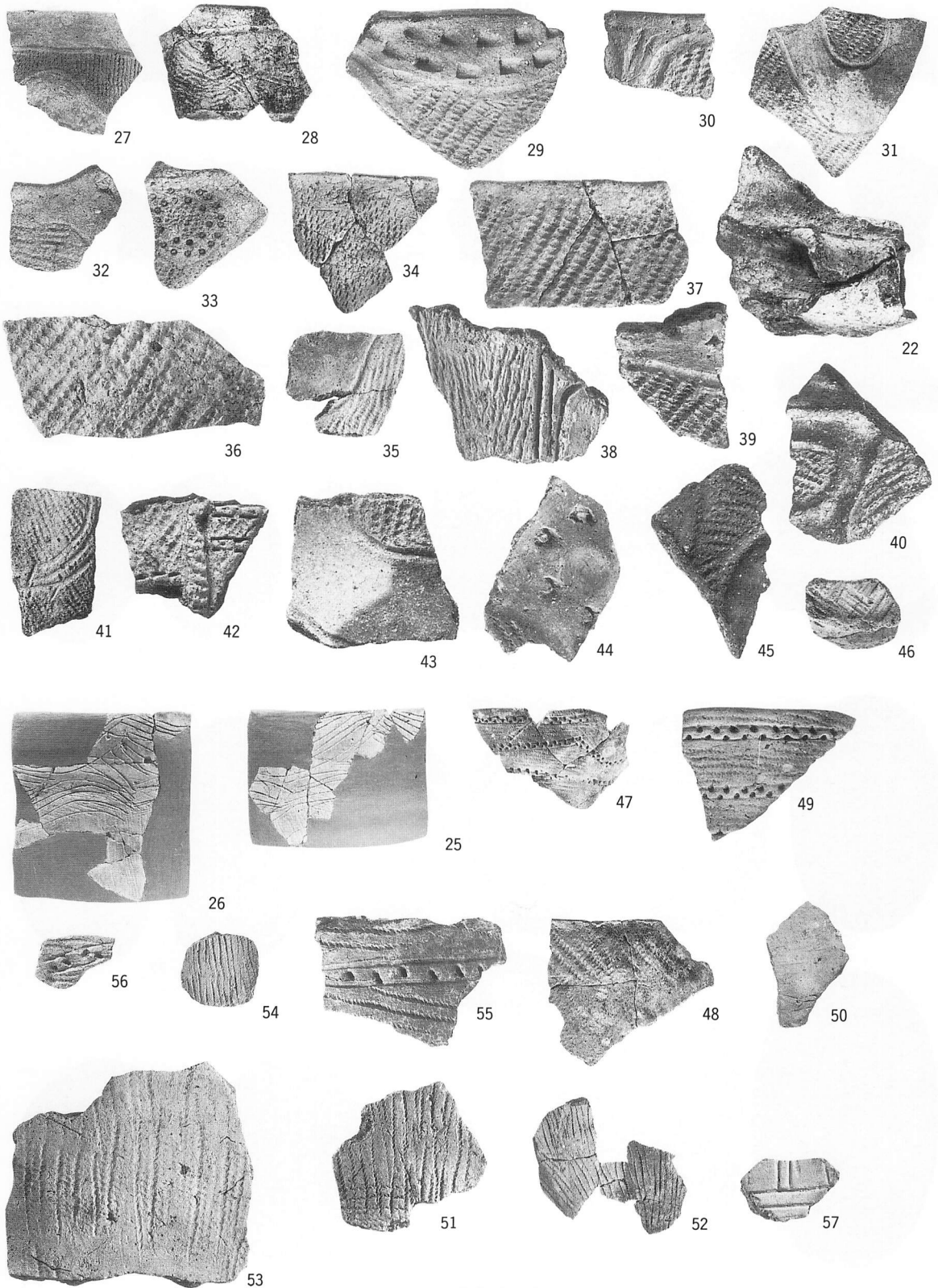
L 25烧土断面

写真图版 5 湾台II土坑·烧土·集石

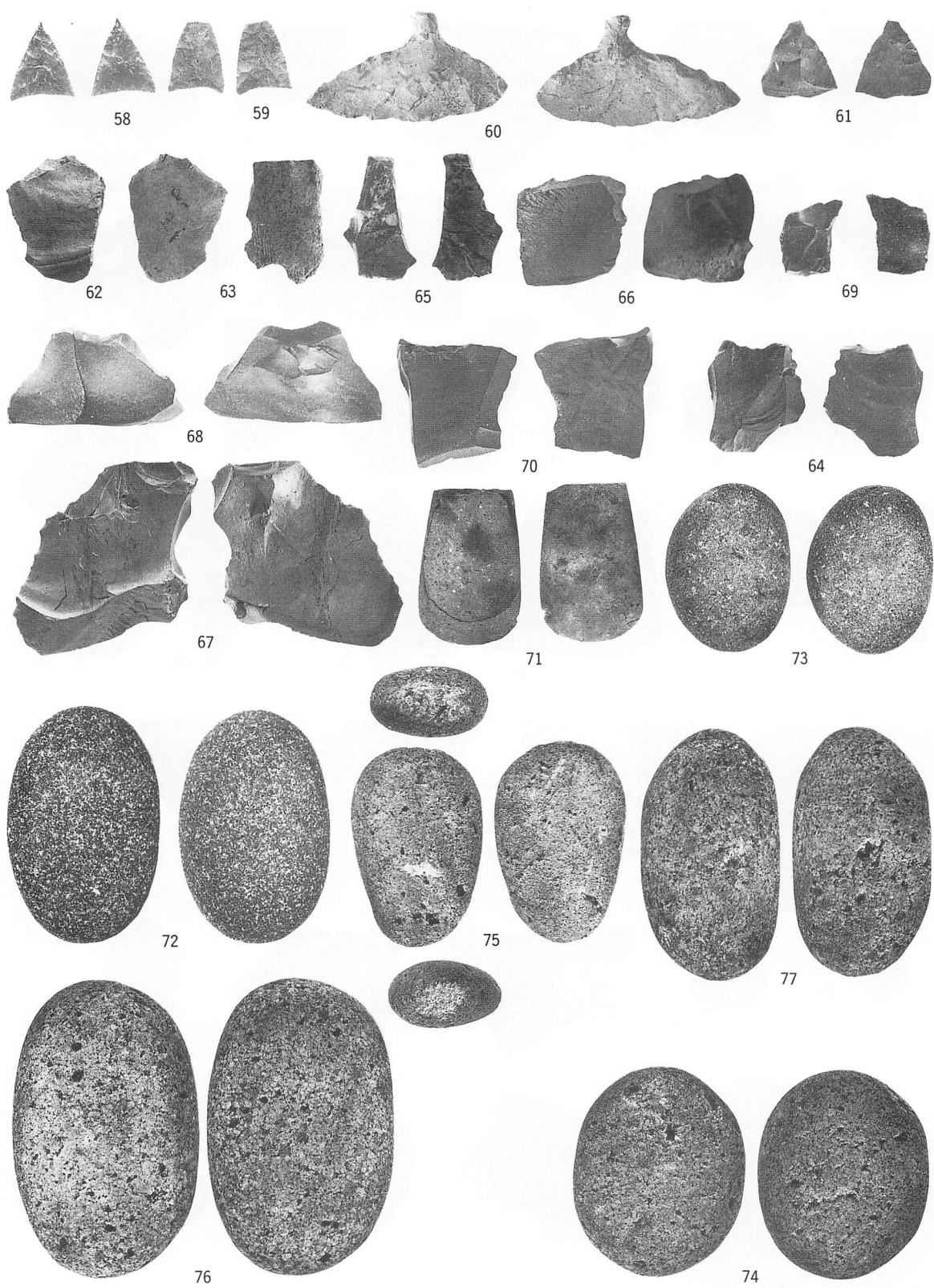




写真図版 6 湾台II遺構内出土遺物他



写真图版 7 湾台II遺構外出土遺物（土器）



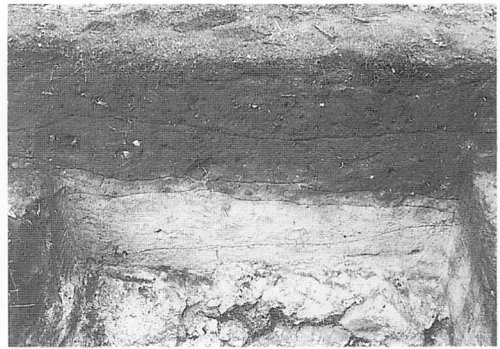
写真図版8 湾台II遺構外出土遺物（石器）



遺跡全景



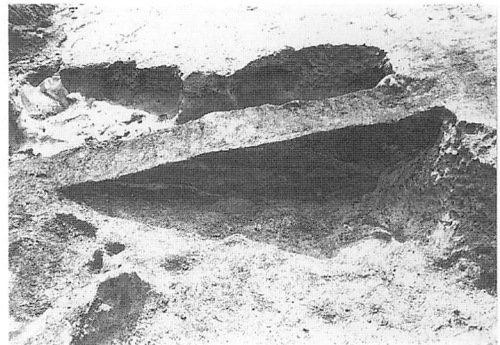
調査区全景（南より）



土層断面



E 11土坑平面



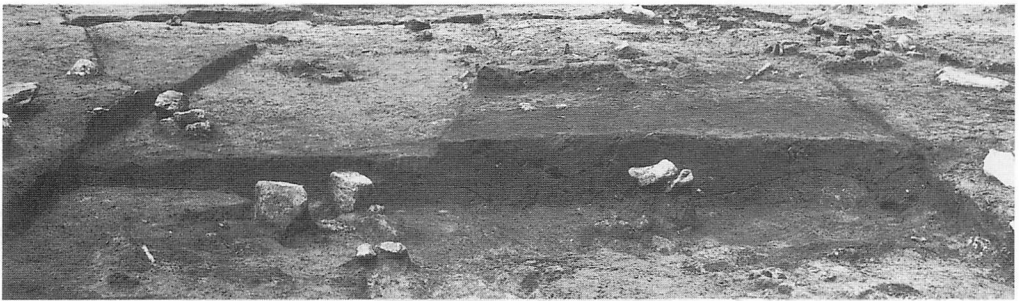
E 11土坑断面

写真図版 9 湾台Ⅲ遺跡全景・土坑





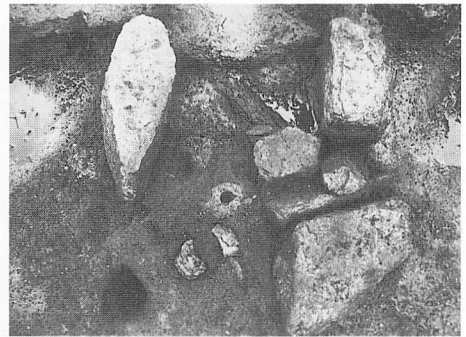
平面



南北断面



カマド完掘状況



カマド燃烧部平面

写真図版10 湾台Ⅲ J 5 住居跡



平面



東西断面



炉跡東西断面



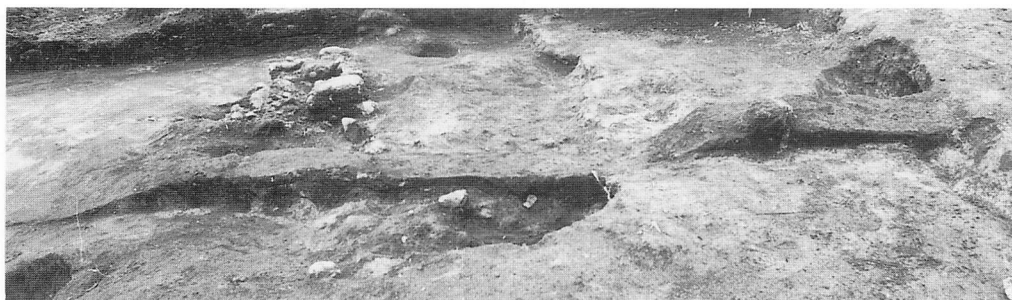
炉跡南北断面

写真図版11 湾台Ⅲ K 5 住居跡状遺構





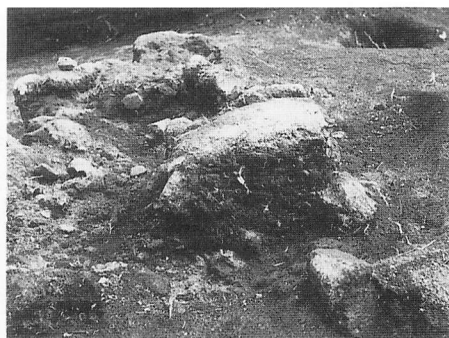
平面



東西断面



鉄滓出土状況

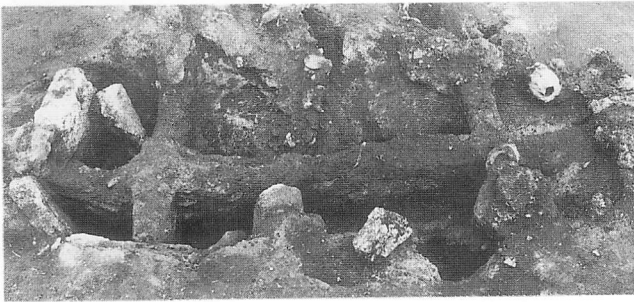


焼土断面

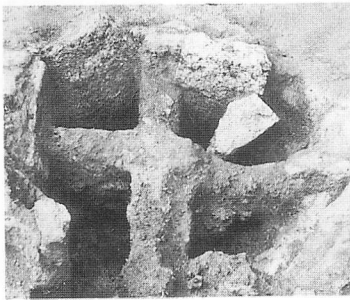
写真図版12 湾台Ⅲ J 6 住居跡状遺構



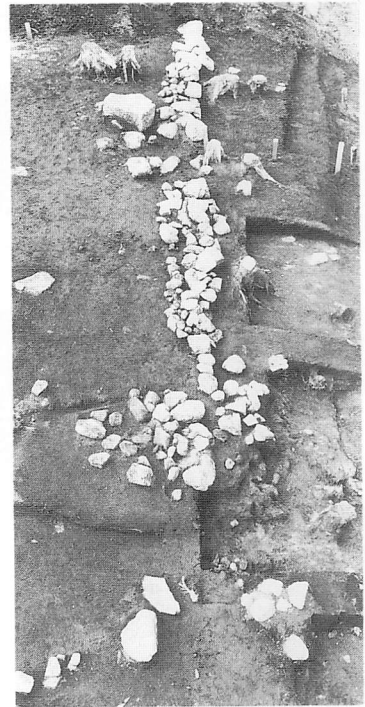
平面



南北断面

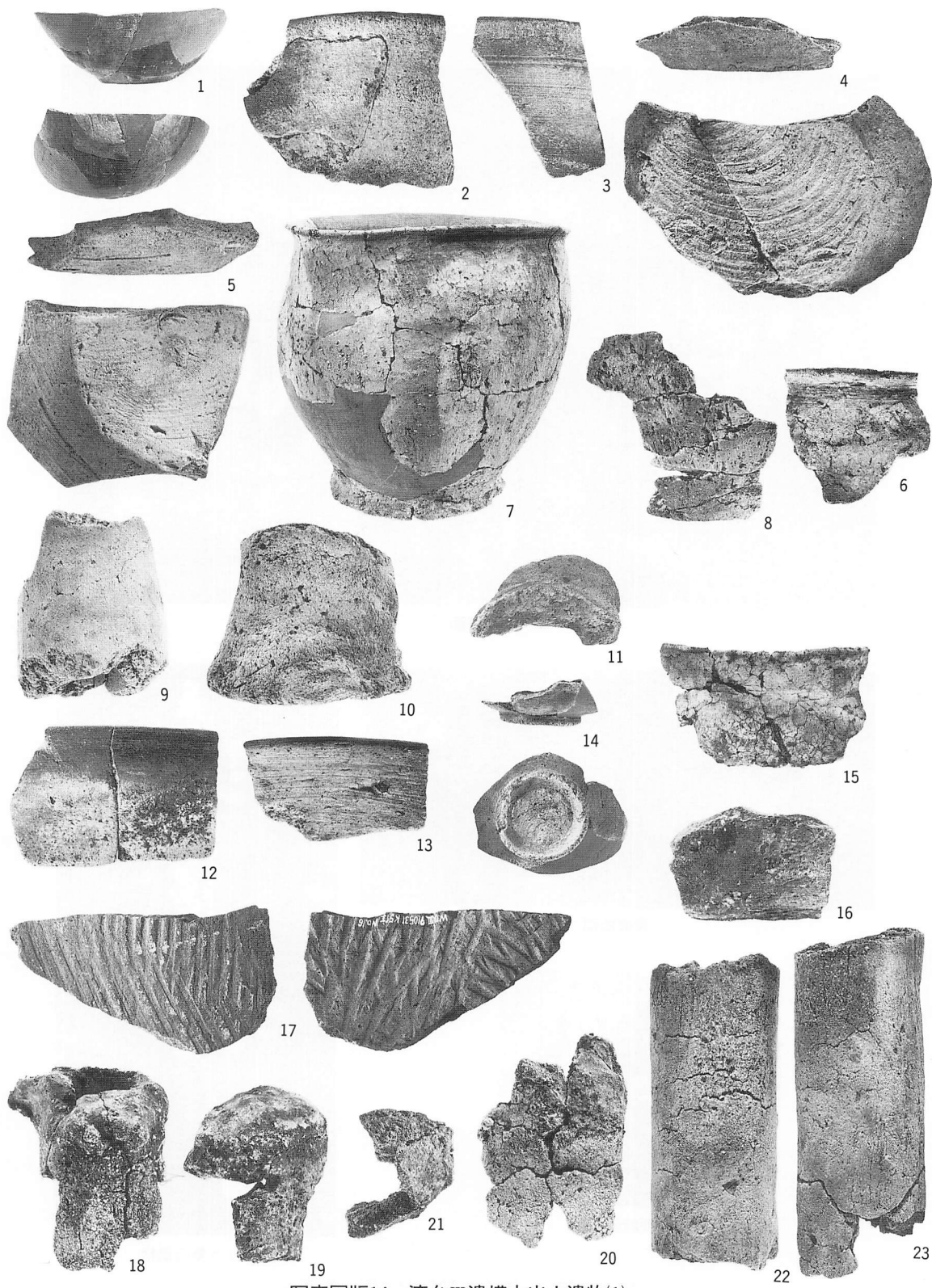


東西断面

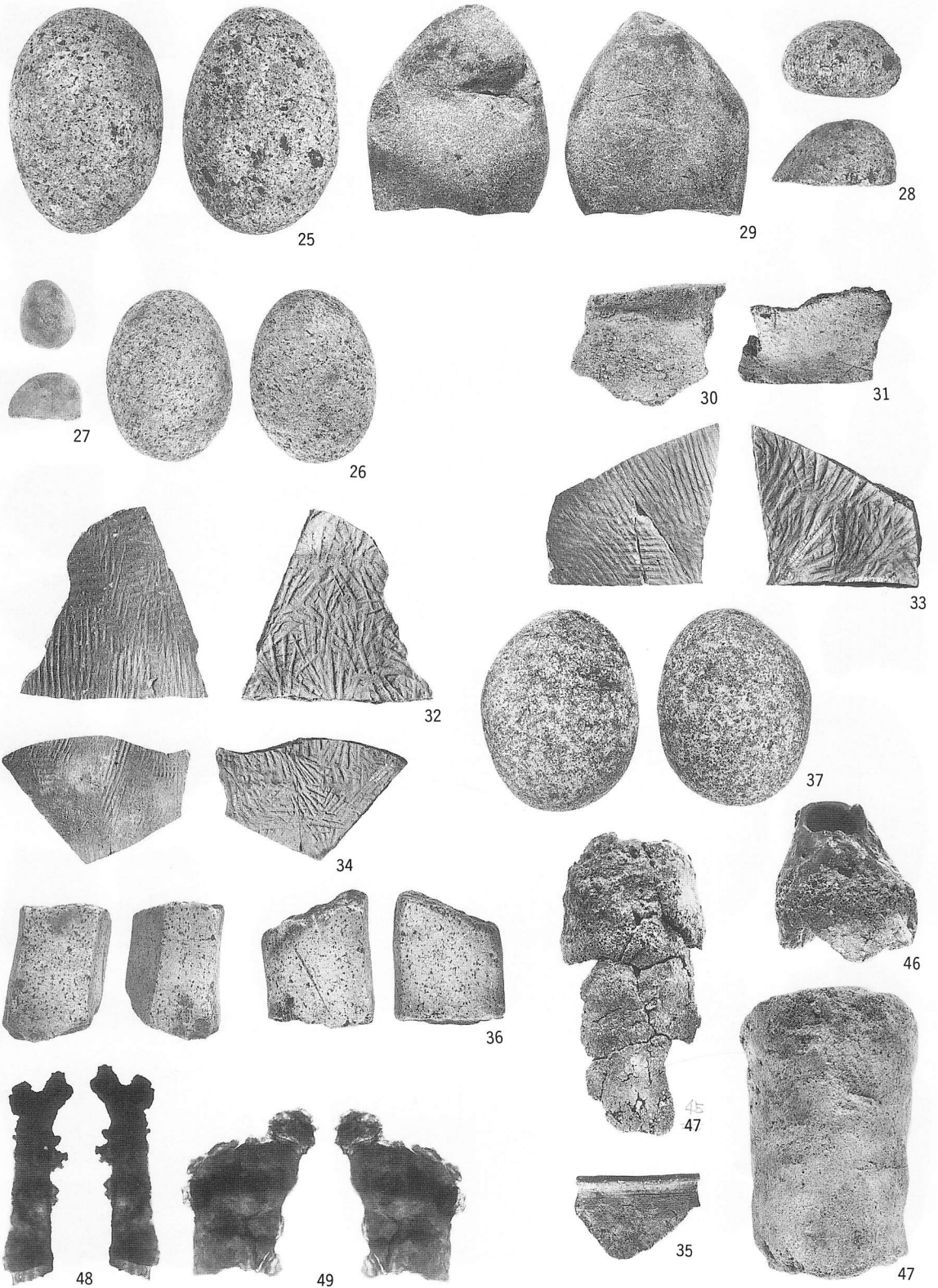


J 5 集石遺構

写真図版13 湾台Ⅲ製鉄関連炉・集石

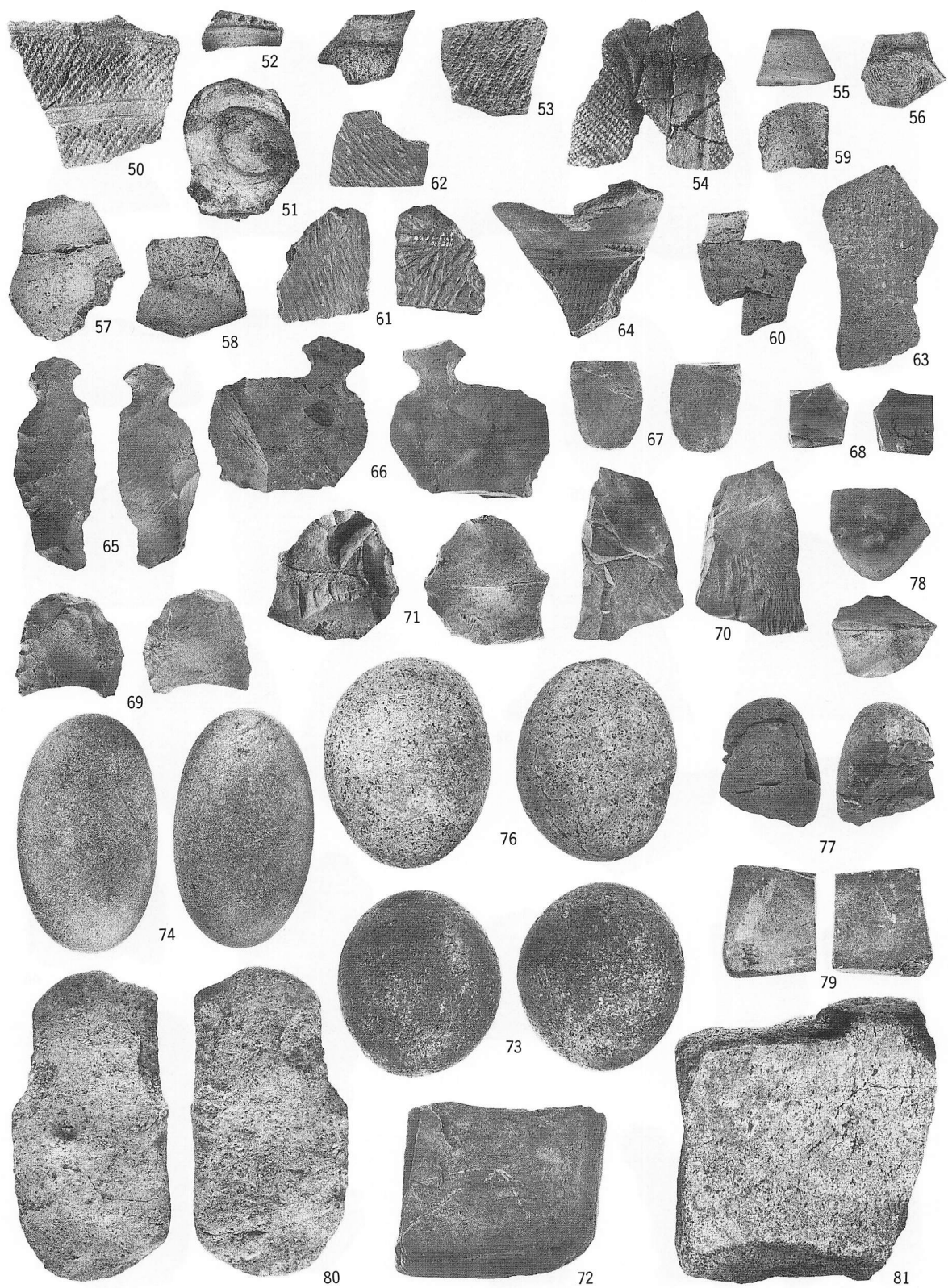


写真図版14 湾台Ⅲ遺構内出土遺物(1)



写真図版15 湾台Ⅲ 遺構内出土遺物(2)





写真図版16 湾台Ⅲ遺構外出土遺物

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼 小笠原 喜 一  
 副所長 高橋 敬 明

## 〔管理課〕

管理課長(兼) 高橋 敬 明  
 課長補佐 森岡 陽 一  
 主任 佐藤 理

嘱託 根橋 文 一  
 〃 吉田 十 次  
 運兼 転 技 士 員  
 事 務 佐 藤 春 男

## 〔調査課〕

調査課長 村上 康 昭  
 課長補佐 鈴木 恵 治  
 〃 三浦 謙 一  
 主任 文 化 財 員  
 専門 調査 高橋 與 右 工 門  
 〃 工藤 利 幸  
 〃 中川 重 紀  
 〃 藤村 敏 男  
 〃 高橋 義 介  
 〃 高橋 正 之  
 〃 渡辺 洋 一  
 〃 佐々木 清 文  
 文 化 財 員  
 専門 調査 斎藤 實 隆  
 〃 佐瀬 隆 雄  
 〃 千葉 孝 司  
 〃 斎藤 博 幹  
 〃 東海林 隆 幹  
 〃 佐々木 弘  
 〃 川村 均  
 〃 鈴木 貞 行  
 〃 伊東 格  
 〃 斎藤 邦 雄  
 〃 神 敏 明  
 〃 佐々木 信 一  
 〃 小原 眞 一  
 〃 酒井 宗 孝

文 化 財 員  
 専門 調査 松本 建 速  
 〃 笹平 克 子  
 〃 花坂 政 博  
 〃 佐々木 務 彦  
 〃 金子 昭 宏  
 〃 濱田 直 人  
 〃 羽柴 雅 之  
 〃 星 晃  
 〃 高木 勉  
 期 限 付 員  
 専 門 職 員 鎌田 精 造  
 〃 阿部 勝 則  
 〃 千葉 悟 由  
 〃 熊谷 博 一郎  
 〃 新倉 信 一郎  
 〃 山口 博 英  
 〃 小山内 透  
 〃 柳田 磨  
 〃 田中 元 明  
 〃 菅原 敬 悦  
 〃 工藤 剛 司  
 〃 高橋 英 樹  
 〃 溜 浩 二郎  
 〃 佐藤 修 一

## 〔資料課〕

資料課長 村松 義 夫  
 文 化 財 員  
 専門 調査 高橋 一 浩



---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第186集

**湾台II遺跡・湾台III遺跡発掘調査報告書**

三陸縦貫自動車道（山田道路）関連遺跡発掘調査

印刷 平成5年3月25日

発行 平成5年3月30日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・9002

FAX (0196) 38-8563

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目10-5

電話 (0196) 41-0585